393
391

傳說之越後

中野城水著

始

39
39

後越之說傳

中野城水著

393-39/1

傳說の越後

中野城水著

大正
9.12.6
内交

はしがき

本書を刊行して未だ半年も經たぬに第二版を出すの機會に逢着しました、一版に比して其内容に於て、編纂に於て、大分面目を新にする所あつた事を著者は嬉しく思ふものであります、傳說は歴史でもなく、またお伽噺でもありません、民衆により築き上げられた一種夢幻的の美しい話の塔であります、雪の越後は其塔の豐かな國であります、彼の山、此の川、此の木、彼の石却々に情趣深き話があるのであります、若し夫等の凡てを集めましたら、一生の多くを黒銀低空下に過した我々の祖先なる越後民衆の眞の生活を知る上に、什麼に好い資料であるか知れません、本書が完成すべき越後夢幻の大塔の一部分なるを得ば著者の幸であります『傳說の越後』と申しても中に佐渡の傳說も加ひあることをお斷りしておきます

目次

大蟹と大蛇……一
東林房の櫻……二
名無しの木……四
玉屋の棒……五
長者塚……八
屋奈加姫石……九
狐の乙姫……十一
おまんが井……十三
繁窪の化柳……十四
袈裟掛松……十六
鐘ケ淵……十七
石の擂……十八
雷休權現……二十
囊の川原……二十三
時平塚……二十四
圭太の池……二十五
彌三郎の跡……二十九
古木の橘……三十一
米山藥師……三十二
西行の戻石……三十三
水草の局塚……三十四
判官塚……三十五
鏡ケ池……三十六
狐戻城……三十九

御廟山……四十四
千本の赤池……四十七
田中鹽石……四十八
蛇山の四塚……四十九
岩の掛橋……五十一
都婆の松……五十二
岩の室屋……五十三
三盃池……五十四
泣き佛……五十五
袍衣姫權現……五十六
八箇峠の怪物……五十八
不出ケ澤……五十九
小更の池……六十一
とら池……六十二
鹽人峠……六十四
御前ケ淵……六十六
舟岡山……六十七
靜女の墓……六十八
石芋と石胡桃……六十七
吉ケ平の池……七十
小國の御陵……七十二
音羽の池……七十三
靈鷹の湯……七十四
北陸の宮……七十六
正續寺……七十七
間遠渡……七十九
沖見嶺……八十
七つ釜の瀧……八十一
うばケ井……八十三
人魚塚……八十四
鹽化の橋……八十五
大納言の舊跡……八十八
月不見池……九十
初君の碑……九十一
愛子の里……九十三
桃園親王邸跡……九十五
宗祇の舊跡……九十六
三面村……九十八
苗字塚……百〇二
山田の燒鮒……百〇四
順德帝遺跡……百〇五
阿若隱れ松……百〇七
八英梅……百〇九
姫名草……百十一
女藻ケ瀨……百十二
秋山入……百十四
板山池……百十六
玄蕃の森……百十七
大蛇ケ淵……百十九
蚯蚓の糞……百廿一
刑部屋敷……百廿二

公債株式
現物問屋
合資會社 巴屋株式店
長岡市一（郵便局前）
電話 特長七九六番
五一五番

日本火災保險株式會社中越總代理店
サンエス萬年筆新潟縣下代理店
キリンビール販賣代理店
長岡市觀光院町
和洋各種文房具類 商 田村分店
田村寅吉
電話九四番

長岡市表五
株式會社 北越商會
電話一〇三番
振替東京四一八七六番
美滿津製運動具
島津製理化器械標本
鈴鹿製少年野球具
化學藥品類
和洋樂器、學用品
MiMATSU, CO., TOKYO, JAPAN
TRADE MM MARK

外科、耳鼻咽喉科
婦人科、泌尿科

神谷病院

長岡市東千手町
電話 二二六番

長岡米穀株式取引所仲買人

期米
株式
現物

長岡市吳服町

大橋新治郎

電話 九八三番
長 五九六番

三ツ矢サイダー
サッポロビール 特約
灘酒 白澤ノ鶴 瓶詰各種
銘酒 美乃川 吉の川

長岡市渡里町
白濱酒店
長電話三四七番
白濱旅館

映畫界の大立物
尾上松之助劇
外國寫眞は歐米第一流のフイルム會社より
直輸入嶄新優秀の名寫眞上場
日活會社直營
年中無休
長岡電氣館
電話四〇九番

薪炭販賣

新潟縣長岡市臺所町

やまにや商店

栗山廣吉

嶄新珍菓

SM

長岡製菓資合會社

長岡市觀光院町

發賣元

寒川長吉商店

電話六二六番

活動寫眞
國活經營
美やま館
長岡市平潟境内
電話五六五番

大蟹と大蛇

直江津の町端づれを注ぐ荒川を溯ると國境近くの關川に至つて川は二又に分れる、右の流れを辿れば妙高山の麓に至り、左の流れを辿れば信濃の野尻の池に至る

千古の雪の雫と麓の深い森の葉末の露とを集めて流れ出る山川は山の裾で苗の瀧の絶壁から切り落とされて底知れない淵を造り、再びすゝり泣くが如き音を立てながら山川は下へ〳〵と流れてゆく

野尻の池は美蓉湖とも云はれてゐる、何處の山湖もおなじことまはりの山々や墨繪の如き森林の影は水に落ちて靜寂幽邃實に繪の如き景色である

傳說の越後

野尻の池に主がすんでゐる、それは雌雄の大蛇であつた、大蛇は毎年十匹づつの子を生んだ

苗の瀧壺に主がすんでゐる、夫は雌雄の大蟹であつた、大蟹は毎年十匹づつの子を生んだ、それは野尻の池に大蛇が子を生む時とおなじの時であつた

苗の瀧の大蟹は子蟹共を引連れては川瀬を傳つて野尻の池へ出かけ、大蛇の子を皆自分の子に食はせた、驚いたのは大蛇であつた、可愛い我子をむざ〳〵食はすことが何て出來やう、死力を盡して防いだが黒鐵の甲羅と鋭利の鋏とを有つてゐる蟹には到底敵すべくもなかつた、大蟹の子は年々恙なく育つたが大蛇の子は斯樣にして一匹も育たなかつた、そして雌雄の親蛇は何時かすみ家をかへたと傳はれてゐるのであつた

東林房の櫻

佐渡の西方村とはごく邊僻の漁村である、其村の娘や子守は

東林房のさくら、世帶だをしの糸ざくら

といふ文句を節面白く歌つてゐるのであつた

東林房とは西方村の小字の名である、其東林房に世にも珍しい垂枝櫻が一本あつたさうである、幹

は高く枝は繁り其たれたる千條の枝には所狹いまでに美しの花をつけ、遠くから望めば紅い霞かとも思はれた、西方村の者は云はずもがな、花時になれば遠い村々の人までもこの垂枝櫻をたづね來た、花の下に酒をくみ歌を歌ひ歡樂の凡てを盡くして日の暮るるも知らなかつた、或年の春であつた、東林房の櫻は何時もの通りに咲いた、人は何時もの通りに花下に酒をくみ歌を歌つた、すると垂枝櫻が獨りでに動き幾度も嘆息を吐いた、初めの程は人は氣づかなかつた、併し夫が幾度も繰返さるるので何時までも知られずにはゐなかつた、人々は驚いた、頭も何も醒た、醒た青い顏の人々は氣味惡くも思はれて一時も其場にゐられなかつた、皆は樽も重箱も其の儘にして家へと歸つた、人々の去つた後にも『あゝ……あゝ……』の嘆息はかすかに聞えた

其の翌年であつた佐渡の名物なる糸櫻の枯れたのは

東林房のさくら、世帶だをしの糸櫻

の歌は夫から後に里人に歌はるるに至つたとのことであつた

名無しの木

三千坊とは、南蒲原郡鹿峠村大字飯田の地を云ふのである、何でも昔はこの三千坊には大きな伽藍があつて、鐘樓に吊るされた釣鐘は珍らしい大きなものであつたさうだ

三條の島の城に三條左工門といふ城主があつた、其城主が京へ上つた時馴染重ねた女がたづね來りしにつれなく門前拂ひをした、女は口惜さに遂に信濃川へ身を投げた、女落ケ瀬は即夫であることはこの前に書いたことがあつた、其後左工門は女の靈にたゝられて一日とて安らかにゐる事が出來なかつた、左工門は遂に城を飛び出してこの三千坊まで逃伽藍の中へ身を隱した、併し京の女の靈は三千坊まで追ひかけて來た、そして伽藍に火をつけ燒いて終つた、お寺の大鐘も其時池の中に落ちて終つたさうである

池の汀に一本の老樹があつた、何んの木やら名はなかつた、只名無しの木と人は呼んでゐる、沈ん

鐘は何處からも見えないが只この木の上に登つて見るとよく見えるといことである

名無しの木にはまた不思議の事がある、木を少しでも切ると木は『三十坊へ行かう〳〵』とかなしい聲を上げて泣き夜も眠られぬとの事である、また切り口から赤い血がだら〳〵と流れ出る、これは京の女の生血であるなどと噂せられてゐる、名無しの木も其後枯れて終つた、美しい京の女の魂も行く所まで行つたと見える

玉屋の椿

柏崎の濱續き鯨波と云へば北國切つての名所になつた、殊に塔の輪の眺望に至つては世にも床しいもの、明治天皇が北越御巡幸の際、暫し御立ち給ひて珍らしき風景よと仰給ひしとは、げに尤もよと首肯かぬものとてあるまい

彼の塔の輪の下は今は頭蓋が淵とか稱して其の底さへ見えぬまでに水深くなつてゐるが、其昔はあ

の邊までは陸續として其處には玉屋といふ長者の屋敷があつたと傳ひられてゐる

玉屋は海産物などを商ふ家であつた、主人の名を德兵衞と云つた、德兵衞は勤勉家であつた、朝早くより夜遲くまで身を粉にして懸命に働いた、其の働きは無てはなかつた、豪者よ長者と謳はれ土藏は幾戸前も裕げに建てられた花のやうな女房も迎へた、玉のやうな子も出來た、何に不足ない德兵衞には夫でも一つの心配があつた、それは金銀の置場所であつた、土藏と云つても下女下男は出入りする、泥棒の破らないとも限らない、折角の金銀をと思へば德兵衞は夜も眠られなかつた、何にか人知れず金銀の置し場はないかと考えた末德兵衞は甘い事を考えた、それは屋敷の裏に竹藪があつた、竹藪には一本の椿があつた、或晴い晩であつた、德兵衞は人知れず其の椿の根の根本に穴を掘り金銀を埋た、

埋た後の德兵衞の心は夫で安らかではなかつた、不安の暗い雲りは始終彼れの心を惱ませてゐた、其結果は德兵衞はふら〳〵した病氣に罹つて終つた、

德兵衞は下男を連れて松之山へ湯治に行つた、行つて半月程經つてのある朝德兵衞が湯壺に入つてゐると、

越後鯨波玉屋の椿、枝は白銀葉は黃金

と湯の中に歌つてゐる者があつた、夫を聞いた德兵衞は亦も心配でならなかつた、下男に話せば何にも知らぬ下男は玉屋の榮華を謳つたのであらうと返事した、しかし主人の不安は到底治らなかつた、直ぐにまた籠に乘り鯨波へ歸り先の椿をたづぬればこは如何に、枝は白銀に葉は黃金に燦然として目を射るばかりであつた、德兵衞は其場に氣絕して終つた、

家人の介抱で一先づ息を吹き返したものの德兵衞の体は元へは戻らなかつた、愈々臨終に近づいた時、德兵衞は妻に顚末を打明けた、そして殘り多い思ひをその儘に息を引取つて終つた、妻が後から行つてみれば椿は元の椿て、椿の根元には夫らしいものは何にも見當らなかつた

玉屋の椿は勿論、屋敷も跡方もなく只殘るは經緯ほゆるがやうな浪の音ばかりであつた

長者塚

刈羽郡鵜川村の女谷には傳說がなか〳〵ある、長者塚も亦其一つであつた

昔女谷の長者が原に長者があつた、長者にはたつた一人の娘があつた、年頃になつた娘を有つた親の心は誰もおなじ、早くよき婿をとたづね〳〵到頭佐渡から婿を貰ふことにした、娘はもとより優しい女であつた、婿も亦氣立ての優しい男であつた、夫婦中は側の見る目も羨ましい程睦じかつた、長者もよい婿を迎ひたと喜んだ、幸福の日は長く長者の家に續いた、併し幸福の神は何時までも長者の家に住きりにはしてゐなかつた、何うした事か婿は佐渡へ戻ることになつた、四十五里の波路を越えて折角來てくれし婿が再び戻られやうもない佐渡へ歸るとは世にも果敢ない契であつた、女は泣いてばかりゐた、泣いて〳〵泣き盡した、末は娘は病の床に臥さなければならぬ身となつて終つた

繼人に別れ病の床に悶々の情のやるせなさに娘は到頭歸らぬ旅に上つて終つた、娘は死ぬ時にも男の事は忘れられなかつた、私が死んだら是非佐渡の見える山の上に埋て呉れよと呉々も遺言した、其の遺言によつて埋られたのが長者塚である

佐渡は見える日と見えぬ日とある、併し長者塚のある山の上よりは何時如何なる日なりとて、佐渡の見えぬこととてはないと云はれてゐる

屋奈加姫石

西頸城郡青海村の比利谷といふ所の畑の中に石塔のやうな形した一つの石が轉げてゐる、里人はこれを屋奈加姫の石と云つてゐる、屋奈加姫とは出雲の國の女神であつた、女神は遙々越後の國まで男神をたづねに來た、たづね越して來た女神は一つの石を持つて來た、何と云つても出雲から遙々越後まで來た女神は疲れてどうともする事が出來なく、到頭持つた石を落して行つて終つた、青海

の畑の石は郎夫であるのであるとゝはれてゐるのであつた

屋奈加姫石には面白い話があるのであつた、夫は此石がよそへ移されるのが余程厭だと見え、幾度移しても一晩か二晩の中にはけろりと元の場所へ戻つてゐるといふことである、さう古い話ではない、青海の村の渡邊林平といふ其畑の地主は女房と次男の良作とこの石を邪魔にして畑の外へ出したけれど、翌日ちやんと元の場所へ戻つてゐたといふことである

何んでも此畑といふ所は昔の塚であつたのではあるまいかと傳ひられてある、其塚の主には何にか怨みがあるのかこの畑の中へ入る馬や犬はきつと死ぬと云はれてゐるのであつた、此畑には昔大きな杉の木が一本生えてゐた、周圍が七八間もあるばかりか、根元から二間ばかりの所から八本の大枝が出て、枝と枝との交されるところは疊の三四枚も敷かれるやうに出來てゐた、春の頃青海の里人は大杉見物とて酒や肴を持つて其杉の根本に一日の歡樂を盡すのが平々のしきたりであつた、青海の近くに黒姫といふ山がある、その山の上の權現様に龍宮から龍燈が上る時は一まづきつと此大

杉に一休みしては山へ上るのであつたさうである、其の名高い神木は今は燒けて後形もないが近くの屋奈加姫の石は誰一人手を觸るものなく、元の姿のまゝに畑の中に風雨に曝されてあるのであつた

狐の乙姫

刈羽郡は北條村の東にそゝり立つ一つの山がある、旗弓山といふは郎夫で、昔其處に城のあつた頃は旗を靡かせ威勢を添へたとかでこの名が生まれたのであるさうだ、麓は今は馬鈴薯や茄子の畠になつてゐるが頂きはさすが昔の樹木森々と茂り中には小さい草葺の祠さへある

今から幾百年前の話しであつた、この社の附近に乙姫といふ神様がすんでゐた、何處から來た神様であるやら、また姿は何様の姫様であるやら見たものは一人もなかつた、只この乙姫は大眼通て何處で何にを話しをしかけても直ぐに返答し、また知らぬ事とてはなかつた

村に五兵衛といふ百姓があつた、或朝釜に一杯たいた御飯が夕方歸つてみると底に僅かに殘つてゐるばかりになつてゐた、五兵衛は驚いて『乙姫様〳〵これは一体どうしたのでせう』と聞けば何處ともなく透き通る聲で『夫は隣の五作が食つたのだ、食つた余りを家へ持歸つた』のだと答へた、五作の家へ行けば乙姫の云はるる通りであつた、また或時一之助といふ男の鍬が無くなつた時も乙姫が云つてきかせてくれた

然うした事から乙姫のおかげで村は全つて穏かに、悪い事一つするものがないやうになつた、然るに其大事の乙姫がふとした事から死なねばならぬ事になつた、話しは然うであつた

或年の秋であつた、社から少し離れた六藏の畠が近頃狸や兎の爲に隨分荒された、困り拔いた六藏は鼠の天ブラで係蹄をかけた、若しや乙姫が過つて手をつけるやうな事があつてはと思つて乙姫に斷つた、乙姫は委見せぬがよし〳〵といふ聲だけは聞えた、然るにの其日の夜中頃、急に乙姫の聲がして『助けて呉れ、俺が悪かつた、あんまりよい香がしたので遂手を出したらわなに罹つた、わ

なを切つて呉れ』と叫んだ、驚いて六藏は飛んで行けばわなには大きな白狐がかゝつてあつた、其後六藏は頂上へ祠を立て白狐の乙姫を祀つた、今の祠は即夫であるといふことである。

おまんが井

今は殆ど通る人とてはない長岡から柏崎へとゆく間にある曾地峠を、道は隨分荒れて草茫々、其の曾地峠におまんが井といふ一つの古井戸がある

昔この曾地峠近くに一人の武士が住んで居つた、其武士は若い上に美しい顔を有つてゐた、本妻おまんの外にこの武士に云ひ寄る女も隨分あつた、併し武士は夫等を近つけやうとはしなかつた、若い時に律義なものが三十過ぎた分別盛りの時に却つて心の駒の狂ひ出すことの珍しくないのが世の常であつた、律義の武士が遂に一人の可愛い女が出來、其女の出來た後の武士は今までの武士であるとは思はれぬまでに別人になつて終つた、愛妾の一言は直ぐに武士の行になつて現れた、武士

は只愛妾の願使に任せた、本妻のおまんの方が遂に妾の教唆によつて武士の刀の錆となつたのは間もない話してあつた、おまんの屍は井戸へ捨てられ、井戸の水は悲憤と怨恨とに消ゆべくなない、おまんの屍を呑んでまた元の姿に靜に納まつた、俄し其井戸に一度（おまん〳〵）と呼べば井戸の水は忽ち湧き立ち浪打つまでに騒ぐのであつた

其の後武士に愛妾はおまんの怨恨に命の縮められ間もなく死んだと言ひ傳へられてある、おまん井の水、今も飲む人とてはない

繁窪の化柳

古志郡中の俣村大字東中の俣は大字が二分して南部を新山と唱ひ北部を繁窪と稱してゐる、この繁窪と新山の中間は約四五町を距てゝあるが、其處に小字古屋敷と稱する平坦の田地があつて其の中間を郡道中の又線が貫通して居るが、その古屋敷は現今の新山分の部落民が往昔住居せる處なので

古屋敷の稱がある、その古屋敷の田甫の眞中に問題の化柳は在るのである今は昔年代は不明であるが繁窪に紺職人にて庄五郎なる者があつた、庄五郎幼にして頴悟神童の聽こえがあつた、長じて增々學業を勵み遂こ一家を爲すに至つた、左れば庄五郎の平素の言動はお百姓の話しとは兎角間隔があつた、其間隔は到頭庄五郎と百姓衆と遂に双互間に訴訟沙汰を起す迄に募り上げ庄五郎は到頭繁窪を立退かねばならぬ様になつた、そして其立退きの際村端づれにて繁窪を睨み付けてこれからこの部落より賢人を出さぬと云ふて立ち去つたさうである、されば新山繁窪こは夫れ以來餘り識者は出來ぬと云はれて居るが問題の化柳こそ庄五郎の遺愛の鉢植えてあつた、年春はり星移り春風秋雨幾百年庄五郎が殘せる鉢植えの柳は周圍丈余直幹大を擡し鬱蒼として年と共に繁茂して長田の眞中に出張りて耕作の邪魔をし若し一枝にても切り取る者は直に狂人となると云ひ傳へられてある、庄五郎は其後北魚沼郡小千谷町に移り大詩を終り町民其靈を祀りて村社境内に晴景神社と奉祀されあるは、即ち斯の化柳の持主庄五郎を祭つたものである

袈裟掛松

妙高、黒姫の麓を走る信越國境の汽車は關川の村を右手に見る、其關川の里に五抱もあるかと思はるるの老松が枝を張り梢を伸ばし面白き風情に翠の露を滴らしてゐる、里人は之れを袈裟掛の松と云ひ、松から程遠からぬ所に一基の木標と石碑が立つてゐて、其木標に墨黒々と『見眞大師關川龍井戸大蛇御濟度の御霊跡』と書かれてあるのであつた

話は鎌倉時代に溯る、親鸞上人は越の直江津の濱から信州戸隱しの山へ五十日間通つて祈りを込めた、上人が何時もの道を通つてこの關川の村近くへ來ると道に一匹の大蛇が怪しげの体を横たへ口からは赤い舌を吐いて道を遮つてゐた、夫が毎日であつた、上人はこれ何にか迷ふ所のあつて斯くは現れ出づるのであらうと、態々直江津の濱から拾つて來た礫に一字づつ經文を書いて其の大蛇に投げつけた、すると大蛇は搔消す如くに其儘姿を隱して再び道を遮るやうなことはなかつた、大

蛇の濟度された地も月移り星變り堤となり畑となり、また屋敷を構えて人がすんだ、併し其屋敷に住む人は一人として白痴の子を生まぬものとてはなかつた、里人は皆怪しんだ、何にか其處には因緣がなくてはなるまいと、或修驗者に見て貰つた、修驗者はこれ屋敷の下に經文書いた石が埋まつてゐる、これが祟りをするのであると告げた、里人は驚いて屋敷を毀ち地を掘つた、掘れば修驗者の云ふが如くに多くの經文ある小石が出たのであつた見眞大師蛇濟度の御霊跡であると云ひ傳ひられ、側の袈裟掛の松は大師が袈裟を脫ぎて松にかけ其處に憩はれたのであると傳ひられあるのである

鐘ケ淵

鐘ケ淵と云つても今ぢや淺瀨になつてゐる、柏崎の西を流るる鵜川を見下す松や櫻のある風情ある丘陵に西光寺といふお寺がある、西光寺に鐘樓がある、鐘樓の鐘が夜も凄く更けて物淋しいまでに

靜な頃になると「海へ行かうか、川へ行かうか」と鳴る、夫が一晩や二晩ではなかつた、毎晩のやうに海へ行かうか、川へ行かうかと世にも淋しい音を立てて鳴るのであつた、或晩また海へ行かうか川へ行かうかと鳴つた、お寺の住職は毎晩々々のこの淋りを氣味惡く思ふよりは、寧ろ腹立たしかつた、住職はまたも鐘の目ら鳴るを聞くや「海へなり、川へなり好い方へ行くがよい」と怒鳴つた、怒鳴つた拍子に凄しい音をたてて鐘の龍頭は切れ、鐘は山からごろ〳〵轉んで到頭鵜川の淵へと落ちた、深夜の寂寞を破つてこの水音、住職は思はず身を縮めて恐ろしがつた

鵜川の鐘ケ淵には鐘が沈んでゐると云はるるに至つたのは夫からの話であつて、鐘ケ淵の名の起こつたのも勿論夫からであつたのである

石の櫃

西頸城郡の青海村と云へばもう越中に近い漁村であつた、村の人々が鰯や鮪の時節に地引網を引く

引いたはづみに網が何うしても動かないことが度々あつた、村の人々はこれは石の櫃に引ッ掛つたのだ、何うともすることは出來ないと諦めて、其の儘網を捨てて引上て終ふ、その石の櫃には傳說があるのであつた

昔青海村字大澤の地に三浪長者といふ長者があつた、ありあまる金銀の寶の有難さを知らない長者は、何にか飛離れた事がしてみたくてならなかつた、夏の暑い日に雪見の遊びがしたいとて庭一面に白飯を蒔散らし、其上に襪靴を穿かせて下女や下男に踏ませて手を打つて喜んだ、正月の元日に可なり遠い氏神の社まで大きな鏡餅を列べて夫を飛石にして其上を駒下駄で歩いて參詣した

斯うした惡遊びは永續きはしなかつた、當然來なければならぬ災厄の神は長者の家を取かこんだ、長者の家は火を出して燒けた、燒けた翌年は青海川の大水で家財を流した、長者の家に大きな石櫃があつた、それは長者の飲み水を容れる器であつた、山川の流れに其石の櫃まで流され遂に海まで落ちて終つた、村の人々の地引網が引掛かるといふのは即ち其石櫃であつた

長者の名は渡邊平左工門といふのであつたと傳へられてゐる

雷休權現

塚山の隧道を通り過ぐれば最う刈羽の北條村で、北條停車場のはるか南方に、八石山が鬱然として聳えてゐる

昔八石山と北條村とに城があつた、八石山の城主を毛利太萬之助と云ひ、北條の城主を北條丹後守と云つたて兩主は至つて仲が惡かつた、時々爭ひが起つた、時きに戰ひに訴へて爭はねばならぬやうなことが度々あつた、併しいくら何んでも北條の城主は八石の毛利氏は敵てはなかつた、毛利氏は智勇兼備の名將で併も年齢まだ若く世にも美しい立派の大將てあつた

北條丹後守に一人の娘があつた、端麗の姿は花を欺くばかり、丹後守は其娘を毛利氏に嫁せしめ表面和親を裝ふて其の隙に陷れくれんとの惡計をめぐらした、美しい娘の毛利氏の奥方として興入

りしたは夫から間もない話てあつた

若い夫婦は樂い其日々々を送つてゐた、殊には近頃は北條氏とは親戚となり爭ひどころか毎日のやうに恩物が取替へさるると云ふ有樣、幸福の日は半年も續いたのであつた

或夏の日であつた、北條氏は今日こそは彈の毛利氏を陷れ積年の怨みを晴らしくれんと使を遣はしよばれて來てくれよと傳へた、惡計あらうなどとは夢にも知らぬ毛利氏は直ぐに仕度をして立出でやうとした、虫の知らしてか其日奥方は何んだか夫の身に不安が抱かれてならなかつた、可愛い夫を離しやることが心許なかつた、そして切に今日は止まり呉れよと頼んだが毛利氏は何に心配があると笑ひながら出かけた

北條氏へ着くやすぐに汗を流せよとて湯殿に案内された、湯殿は毛利氏のこの世の地獄てあつた、四方からとざされて蒸殺されやうとした毛利氏は初めて北條の卑怯を知り悔るけれど最う何んとすることが出來なかつた、思へば今朝の妻の諫止を聽かなかつた自分が恨めしかつた、

毛利氏の亡くなつた後の奥方は直に夫の後を追ふて吾れと吾が咽喉を刺して鮮血にまみれながら若い身を滅ぼして終つた、八石山の城は間もなく北條氏の手に歸してしまつたのであつた

八石山に時々怪しの火が現れた、其の火はきつと一度は北條村へと流れる、里人は震えながら其火の消ゆるを念じた、ましてや夏の夕卽毛利氏の悲憤の最後を遂げた日には其火は一晩中消えなかつた、里人は只恐れおののき何うともすることが出來なかつた、火は必ず毛利の奥方の怨恨である

と傳ひられた

北條の村に普廣寺といふ寺があつた、寺の坊さんはどうしても其怪しい火を鎭めねばならぬとて、權現堂を建て三七二十一日のお經をあげて靈魂を弔つた、八石山の怪しの火は夫から二度と現れなかつた、雷休權現はさうした傳說を有するお堂であつた

賽の川原

佐渡も北海沿岸は淋しい中にも亦淋しくロビンソンの流された孤島生活其儘を思はせるやうな村里が此處彼處にとある、その中にも外海府村は佐渡の最も北の端づれの村であつた

海府の村に賽の川原といふ所がある、海岸にある大きな岩の平な所やまた岩の割れ間などには、隙間もない程綺麗な小石が幾個所となく積まれてあるのであつた

その小石に村の何人も手を觸れたものではない、何時如何なる人が來てはこれを積みゆくか知れない、時に戲れに村人がこの積石を崩し置けば、翌朝は必ず元のごとくに積み直されてある、村人は不思議に思はれてならなかつた、これはきつと此の世の賽の川原であらう、そしてこの石を積み來るは十歳以下で亡くなつた子供に相違ないと噂せられた、殊におかしいのは村の子供が亡くなると其の石の積み方の量が殖えるといふことである

佐渡の北海岸―荒涼の漁村に囊の川原がある、淋しい感じを與ひずには措かない

時平塚

北魚沼郡の吉谷村と云へば隨分草深い田舍である、其村枝逃入分といふ地に二つの大きな塚がある
塚のまはりに樹木生繁つて小さい石祠さへある、土地の人は一つを時平塚と云ひ、一つを妃塚と云
つてゐる
醍醐天皇の御世菅原道眞が藤原時平の讒によつて筑紫に流されたことは歴史の傳ふる所である、道
眞のみか一族一門を悉く或は流し或は軌つた、時平は流石に氣持は良くはなかつた、日々毎日良
心に苛めらるる時平は居堪えぬ位であつた、殊には道眞の神靈が祟るが如くに思はれて時平はその
儘にしてゐられなかつた
時平夫婦は遂に罪亡ぼしに京を旅立ち遂に越の國まで落ちて來た、そして二人の足はこの北魚沼の

吉谷へと辿り着いた、時平夫婦はこの吉谷の里に四年程暮したが遂に病氣の爲め死んだ、時平塚、
妃塚はその二人の亡き骸をうめた塚なりと傳へられてあるのであつた、同村の佐藤氏は時平公の末
裔であると云はれてゐる

圭太の池

高田から東南へ二三里も進めば頸城平も漸く暮きて笠冠山の山々の裾が長くひいてゐる、その山脈
の山腹に置き忘れられた鏡の如くに周圍の山々を寫して凄く亦美しい一つの池がある、圭太の池と
も靑柳の池とも亦坊が池とも稱せられてゐる
池の周圍は彼れ是れ一里位はあらうか、岸邊に生え茂る樹木に藤の房の垂れ、谷間には殘んの雪の
斑だらに見ゆるも床しい、鶯の聲ものどかに聞かれる頃には毎年この池のお祭がある、即ち池の眞
中には一つの浮島があつて其處には美しい辨財天を祀つた祠があるのであつた

昔箕冠山に城があつた、城の大名を坐太と云つた、名こそ卑しげなれ世にも稀なる美男子であつた

處が此の殿の許へ、夜な〳〵通ひ來る不思議の美人があつた、嚴めしい城門を何う潜つて恁うして毎夜奥深い屋敷に妙齡の婦人が忍び入るか、近侍の者も一人とて知るものはなかつた、たゞ夜も漸くふけ渡つた頃忍び入り曉近くにまた何時の間にか忍び去ることだけは判つた

近侍のものはいろ〳〵にして殿に諫めた、けれども殿の心は益々其の美人に引つけられていつた、或晩の事であつた、城主は具足に身を固めて何處ともなく城を出た、出た間もなく殿の愛馬が戻つて來た、城中の驚愕は一通ではなかつた、それ城主が逃げ給ひしぞ、何處へ行かれ給ひしと上へ下への騒ぎであつた、その間に一人箕冠山續きの池の畔に城主の鎧兜が殘されあるを告げたものがあつた、さて殿はこの池の中へ入り給ひしか、先の毎夜たづね來りし美人はこの池の主なりしかと初めて覺つたのであつた、坐太が池の名は夫れから名づけられたのであつた

坐太の池をまた坊が池といふ、これにはまた變つた一つの傳說があるのであつた、青柳村に一軒の

農家があつた、夫婦の間には後とも先ともたつた一人の男の子しかなかつた、男の子を坊太郎と云つた、坊太郎は夫婦の大切の玉であつた、寶であつた

其坊太郎は釣が大好きであつた、ひまさへあれば青柳の池へ行つては糸を垂れてゐた、日暮方坊太郎が竿を肩ねて歸る時が兩親には待ち遠しかつた、若しも間違ひでもあつてはと始終胸を痛めてゐた、其の心配が不幸適中した凶日が兩親の身に來た、兩親の心配は例へる物はなかつた、村の若衆を頼んで青柳の池の附近を『坊太郎や――』とさがす聲は淋しく木魂するばかり兩親は殆ど狂亂せんばかりに嘆いた、併し其嘆きも甲斐がなかつた、三日過ぎ五日過ぎ遂に十數日經つた、夫婦も最う諦めねばならなかつた、其處へ坊太郎が飄然として例の如く竿を肩にして籠を手にして戻つて來た、兩親の喜び、何んだか夢の如くに思はれて吾れと吾が目を疑はずにゐられなかつた、併し坊太郎は矢張坊太郎であつた、夫婦はどうして今まで吾れ等に心配かけしぞ、一体何處にどうして來たぞと訊ねれど坊太郎は、はつきりした返事はしなかつた、そして餘り疲れたれば休ませくれよ、そ

して私の休む姿は見て呉れるなと云つて奥座敷へ入つた

坊太郎が座敷へ入つてから両親は最後の一言葉が氣にかゝつて仕様なかつた、眠姿を見てくれるな……夫婦の口の中に幾度か夫が繰返された、そして遂に二人は足音輕く座敷に忍び襖の隙間より覗けばこは如何に、座敷は水一杯に湛えて其の中に二本の角嚴めしい龍が横はつてゐるのであつた、

両親は驚愕のあまり只呆然たるばかり、暫くして吾れ等の不幸を知しみ大聲出して泣いたのであつた、其の泣き聲を聞いた龍は急に雲を呼び風を起して、行方も知れず昇天して終つた、人は村の坊太があまり釣をしたので池の龍となつたのだと噂した、坊が池の名は其因縁からのであつた

辨財天には歪太をも祀つてあると云ひ、また坊太郎も祀られあるのだと云はれてゐる、今も青柳の池は水滿々と湛だえ淒艶の水深い底に神秘の傳説を抱いてゐる

越後人こ最も深き干係ある東洋紡績株式會社

東洋紡績會社は日本に於ける最も古き歴史を有する而して又最も大なる紡績及び綿布製織の大會社である資本金五千萬圓本社を大阪市北區堂島濱通二丁目に置き全國に十九工場を有し從業職工男九千二百四十八人女三萬五百人其内越後の女三千人は左の各工場に勤めて居るのである

日市工場	伊勢國四日市濱町	三百人
知工場	愛知郡知多村	五百人
津工場	名古屋市下廣井町	百人
尾張工場	伊勢國津船頭町	百人
名古屋工場	名古屋市尾頭町	二十人
古屋工場	尾張國津嶋町佐織村附近	二百人
張工場	伊勢國桑名郡	五十人
名嶋工場	尾張國牛田町	二百人
桑名工場	東京府下王子町	九十人
津工場	大阪市三軒家上ノ町	四百人
名津工場	京都府伏見町	百六十人
尾張工場	伊勢國富田町附近	百人
知多工場	富洲原村	五十人
愛知工場	伊豫國川之石町	十人
四日市工場	播磨國姫路市外水上村	二十人
三軒家工場	埼玉縣栗橋町	百人
王子工場	遠江國濱松市	十人
大阪市工場	伊勢國宇治山田市	十人
伏見工場	川之石工場	十人
富田工場	姫路工場	十人
洲原工場	豐橋工場	十人
伊豫工場	濱松工場	十人
川之石工場	豐橋工場	十人
姫路工場	栗橋工場	十人
豐橋工場	濱松工場	十人
栗橋工場	山田工場	十人
濱松工場		
山田工場		

東洋紡績會社の職工待遇

東洋紡績會社の各工場は工場法に遵ひ滿十二才以上の女子及び滿十五才以上の男子を採用し毎半期會社の利益に應じ各人の技倆、勤務年限、成績を考査して賞與金を配分し尙壹ケ年以上の勤務者には毎月勤續賞を附し契約滿限の時は滿期賞を與ふ

職工一般の世帶者には現今米價補助及び家族補助金を給し尙ほ日用品分配所を設けて原價にて米噌薪炭、雜貨の給供をなす

各府縣よりの移住世帶者の爲には社宅を設備し單身者の爲には寄宿舍あり寄宿舍には舍監あり世話掛あり各分舍に室長ありて風紀の維持、衛生上の注意等父兄に代つて保護監督をなし其の日常經費の如き大部分を會社より補助し一日僅かに金拾貳錢を徴收するに過ぎず、病者は各工場に設けある療院に收容し醫士、看護婦をして懇切に治療せしめ其の藥價及び療養中の食費滋養品一切會社に於て負擔す若し父兄にして看護を希望する者には旅費及び食費は會社之を支辨し郷里に歸りて療養をなすものは旅費を給するのみなず毎月保養料を送る

其の外勤務中の者及び會て勤務契約年限を滿了し退社せし者の家が水、火、震災に罹り又は家族に死傷者ありし時等は見舞金を贈與す

寄宿者は其の郷里の地方的慣習を重んじ同郷者を一舍に收容するを以て各工場到る處越後村を現出し團欒の樂みを縱にす

彌三郎の跡

西蒲原郡中島村に彌三郎の邸跡とて畠の中に方三間程の荒地がある、老樹も一二本生えてゐて何んとなく由來ありげの跡である

傳說に此處は昔彌三郎といふ男の住居であつたと、彌三郎には一人の母があつた、母は彌三郎を至極親切に可愛がつて呉れた、併し里人は其母が毎夜外へ出ては奇怪の惡業をなすと噂してゐた、しかし誰一人其實際を見た人とてはなかつた

彌三郎は獵師であつた、毎夜網をもつては此方の森、彼方の林へと鳥を捕つては家へ歸つた、或夜の事であつた彌三郎は何時もの如く仕度をして出た、出は出たものの何んとなく氣分が勝れなかつた、彌三郎はまた明晩もあることなればとて、戻つて來た、其時突然後ろから彌三郎の頸筋をつかみ引き立て行かうとするものがあつた、彌三郎は豪勇の男であつた、直ぐに腰にした鎌で其の腕を

つ斬た

家へ歸ると母は加減が惡いとて寐間に一人で臥してゐた、そして今日の早歸りをたづねた、彌三郎は母の驚くを氣の毒に思ひさりげなき体に言葉を濁した

其翌朝であつた、彌三郎は母は何うしたことかと寐間へたづぬれば母の姿は見えない、不審に思つた彌三郎は其處此處と探ねた、すると寐間から戸口へかけ鮮血が滴つてゐた、驚いた彌三郎は其の血の痕を訪ねいつたら到頭目分が昨晩怪物を斬つた場所へ出た、彌三郎はさては我母は鬼女であつたかと初めて覺つたのであつた

其後彌三郎はその土地を去つた、去つた跡には何人も住まう者はなかつた、彌三郎は何處へ行つても人になづまれなかつたと見え、彌三郎のすんだ跡だといふ所が西蒲原には方々にあると傳へられてあるのであつた

古木の橘

後醍醐天皇の忠臣日野資朝が佐渡へ流されたことは歷史の傳はる通りである、愈々佐渡へ流され本間入道のに邸に圍まれ遂に其近くの原に首を刎ねられたのも人の知る所である、資朝卿が配流の途中出雲崎に舟を待つた

資朝の宿つた家は山本入道信阿の家であつた、其家には古木の橘があつた、資朝は殊の外夫が氣に入つたと見えて

わするなよ道は波路を經だつとも春はらず匂ひ宿の橘

と自筆の短册を殘して立たれた、夫から其家は家號を橘屋と稱するに至つたといふことである

米山藥師

さあさ參らんしよ米山藥師一つ身のためささ主のため……

の米山甚句は流石北國の情調と北國の女の熱烈さとが溶け合ふて趣深い俗謠である

あの突兀として聳ゆる米山の頂上藥師堂に祀られある藥師佛は泰澄の作だと云はれてゐる、泰澄は越前國麻生津の生れの人であつた、白鳳十一年生れと云ふから隨分古い話である、泰澄は小さい時から他の兄弟とは違つてゐた、十二歲の頃よく夕方褒を晦ませた、家の人々は不審に思つて兄をして其後をつけさせる、すると泰澄は白山へずん〳〵登つて行つた、兄は到底續いて行かれなかつた、ほと〳〵になつて歸れば泰澄は既に家歸つてゐた

泰澄の行動は不審たらけであつた、大寶二年に能登から沙彌が一人來た、二人は家を出て北國へ旅し遂に米山へ籠もつたのは夫からの話であつた、沙彌は海上を鉢で積んで運ぶ品を鉢を飛ばしては

貰つてゐた、或日米船が通つた、沙彌は例の如く鉢を海上に飛ばせて米を乞ふたに舟主の清定は之は公へ納むるものなればと斷つた、沙彌は法を使つて直に船中の米を飛ばせて米山へ運ばせた、清定は驚いて上陸し米山へ上りあやまつた、沙彌はまた米を飛ばせて船に送り返した、米山の名は夫から初まつたのであるとの事である、天文十二年には上杉謙信が登つたことがあると傳ひられてゐる

西行の戻石

西行も越後へ來たことは事實らしい、秋の夕暮をあはれむやうな歌は殘して行かなかつたが、西浦原の國上には西行の戻り石といふのが殘つてゐる、隨分大きいもので長さ一丈餘もあり巾も相當のものである、西行の尻の五つや六つは載せるには譯はない

西行が國上寺へ參詣しやうと此處まで歩いて來た、あまりの疲れにしばし足を休めんと石に腰打掛

けてゐた、すると其處へ八九歳の子供が三四人連れ立つて籠を持つて前を通つた、惡戯の西行は「何處へ行く」とたづねた、子供は直ぐ蕨採りに行くと答へた、西行は蕨に手を燒くなと笑ひながら云つた、呆氣にとられた子供等は何の事か知らずに笑つてゐたが、賢げの一人は私等は手を燒くも貴方は檜笠を冠つてゐるが頭の燒けないやうにせよと云つた、之には西行も一本まゐつてそこ〳〵に其處を立去つた、西行戻り石は夫からの話してある、今は其石上に小さい祠が立つてある

水草の局塚

南瀧原郡は三條に近い坪根村に一基の古墳がある、里人はこれを局塚と云つてゐる

水草の局は平賴盛の奥方である、壽永の秋の平家破落に賴盛一人逃れて、三面村に身をかくした事は(三面村)にも書いて置いた、賴盛はその盡羽越の國境萬山の底に其貴き身を其儘埋て終つたであらうか、或人は賴盛は再び奥方水草の局を連れ三面村を出て遂に三條に城を築き其城主となり、附

十萬石の領主として昔に比べては物の數にはあらねど、兎に角枯れ木に花を咲かせたのであつたこれといふのも賴盛が源賴朝と乳母を等しうしたといふ因緣が恵うさせたのであつた

賴盛は老後城を子に讓つて中の島に隱退した、水草の局も夫に隨つて中の島に住んだ、局の塚は即ち山河幾百里を隔つた越のはてへ落ちのびた京の美しの人を埋たかなしい標であつた

判官塚

三島郡西越村の海岸久田の里に判官塚とて印ばかりの古墳がある、里人はこれ源資朝行臣の墳墓であると傳へてゐる

資行が平清盛の傲慢を憤つて世にいふ鹿ケ谷の會を開き藤原成親や僧俊寛等と相謀り清盛を除かうと企てた事も水の泡、遂に治承元年六月佐渡へ流さるることになつた、資行は出雲崎まで來、いよ〳〵佐渡へ渡るといふ時になつて病に冒され遂にその儘其處に果かない命を落としてしまつた、判

官塚は即ち其幽恨永き人の魂を埋めた所と傳ひらるるのであつた

鏡ケ池

直江津の町を西にはづれ北國街道は眞直に通じ、十町も行くと其處は所謂國分寺ある五智の里である、國分寺の裏手即ち國道の右手近くに一つの池がある、池の畔に立てられた標札に墨黑々と「鏡ケ池」と書かれてある、湛た水の面には愁はしげの菱が小さい葉を浮かせて、夫等の間だからかなしそうな花をつけてゐる、汀には世にも珍らしい片方にのみ葉の生えた不思議の蘆が此岸、彼の岸にと劍のやうな葉をむらがらせ、よく葭切りなどが忙しげに啼いてゐる時は秋の初めの夕暮頃大きな太陽が赤々と日本海の彼方に沈まうとする頃、此處に見慣ぬ一人の旅僧が疲れた姿に或家の門口に立つて一杯の水を所望した、併し其處の家では素氣なく斷つて終つた、旅僧はまた一軒に願つた、願つたが其家でもまた先の家と同じやうに斷つた、一杯の水の所望にさへ應じて呉れない里人

の不人情を其旅僧は少しも恨むやうな心は起さなかつた、夫ばりでなくこの里の水の不自由から遠い山から水を汲み來ることを知つた旅僧は何事か或事に思ひ當つたが如くに砂丘の上に突つ立ち上り眼を閉ぢ手を合せ聲も朗かに讀經を初めた、其頃は日はもう遠く日本海の彼方に沈んで夕燒の空の色さへ薄らいだ頃であつた、旅僧の讀經は永い時間を費した、そして漸く終つた刹那に今まで一片の雲さへ見えなかつた空は一面に墨を流したが如く、見る〳〵豆雨は沛然として至つた、旅僧は其篠つく雨の中に磐石の如くに動かなかつた、冥目合掌世にも物凄いやうである

雨は益々烈しい、地に流れる水は瀬をなし、淵を造り旅僧の足元近くは忽ち池が出來た、雨は霧たる若い旅僧はニツコリ笑つて其岸邊に立つた、そして底の石さへ數へらるるやうな清い水を掬んで渴た咽喉を潤したのであつた

其後旅僧は其他の畔にさゝやかな草の庵を結んで旅の疲れの脚を休めた、そしてわれとわが姿を刻まんとて例の鏡の如き水の面にわが姿をうつし、其姿を見ては鑿を持つて專心に刻んだ、男らしい

中にも何處となく含まれある溫かい情の現れある神々しい彼の姿は、日に〳〵彼の鑿の先によつて木に刻まれていた、彼の鑿を持つた時はもう何物もなかつた、只彼の魂を刻み込むかと思はるゝばかりに槌を打つた後には大慈大悲佛像が現れ來るばかりであつた、或日の事であつた旅僧はまた鑿を手にした、自分の姿を現しゆく鑿の色ひは自分の深い心持を其の儘浮かばせていつた、其時何んとも云ひぬ美しい笛の音が池の面を漂はせて旅僧の耳へ入つた、旅僧は思はず鑿を休めて見ればこは如何に、對岸の蘆の間に天女のやうな美しい乙女が半身を現して溶けるやうな艶な微笑を顏一ぱいに浮べてゐる、白い手には蘆の葉を持つてゐた、先の妙なる音は其草笛の音であつた

旅僧は思はず手の鑿を落さうとした、併し彼れは素早く元の彼れに歸つた、そして乙女の微笑も草笛も外にしを再び力强く鑿を打込んだ、カン〳〵いふ鑿の音は魔の乙女の草笛の音を壓して終つた夫から乙女は二度と誘惑の姿を池の畔へは現さなかつた、旅僧は毎日心ゆくばかりに佛を刻んだ、そして愈々出來上つた時、彼れは佛の臺に『空海刻』と三字を刻んで何處となく立ち去つた、さては

先の旅僧は弘法樣であつたかと後に里人に初めて知られたのであつた

鏡ヶ池の名は弘法が姿を映したことから其の名が生れたことは勿論である、池は片葉の蘆は魔の乙女が草笛にしてから片方にのみ生えないと云はれ、今も鏡ヶ池の蘆を『片葉の蘆』と名づけてゐるのであつた

狐戻城

磐越線を通る人は必ず驚嘆と憧憬の凡てを擧げて仰ぎ見るであらう、彼の阿賀の淸流と常浪の激流と相合する處、峨々たる岩山の突兀として天に聳ゆるを、是が卽越の妙嶮山と謳はるゝ鰐鱗山で狐戻城趾は實に其山腹にあるのである

狐戻城は建長二年金上盛弘の築造にかゝり、何でも元和の初め頃廢毀されたやうに歷史には傳へてゐる、爾來幾百星霜、殘礎徒らに蔚々として英雄の雄圖、そぞろに昔を偲ばしめ、感慨胸に迫る

ものがある

盛弘から十三代目に盛備といふ智勇兼備の名主があつた、春も漸くたけて城のまはりの櫻花の吹くともない風に飄々と舞散り、近くの藪に日毎に來啼いた鶯もトント姿を見せぬやうになつた頃ふとした風邪が嵩じて遂に重態に陥つた、日に日に加はる痛々しい衰弱に、部下の將士の顏は憂愁の暗に鎖され、藥よ、祈禱よとの心つくしも最早絶望となつた時、物はためし、一つ城の麓に湧く溫かい靈泉を汲み取り來つて御體を溫め申してはといふ者があつた、衆議は早速次して其溫泉を汲み取り來ることになつた、（その溫泉は鹿の瀨溫泉と稱し今も浴客中々に賑はふてゐる）盛備の小姓に蔦丸といふ少年があつた、秀でた眉、雪の如き肌は女にも見まほしいと荒くれた武士に仇口きかるゝ優男であつた、蔦丸は自分の爲めに大切の主人、殊には平生の寵遇を思へば其溫泉汲みの役目は是非自分にと願はずにはゐられなかつた、蔦丸の殊勝な願は上役の容るる所となつた、蔦丸は喜んで白の綸子に紫色の美しい撫綿散らした水干を高々とくゝり上げ、桶を片手に毎日懸崖けはしい

阪道を、蔦に縋り藤につかまりして汲み運んだ、主人の重い病も不思議に薄紙剝ぐが如くに輕快に赴いた、蔦丸は固より他の將士の喜び譽へんに物もなかつた、城主樣の御命が助かつたぞ、御運が開けたぞよとの嬉しい言葉が賑やかに交された時は、世はもう淸々しい夏と變り、若葉青葉の新らしい衣に包まれた麟麟山一帶は繪のやうに美しい裝ひを見せた、城主の病氣全快も茲旬日と迫つた或朝の事、蔦丸は平日の通り桶を差しのべ〳〵と湧き出づる溫泉を汲み取らうとすると、怪しや泉の面に人の姿が映つてゐる、驚いて振あほげば花の樣な一人の少女が面肢げに立つてゐる、魂をも蕩かさんばかりに燃ゆる瞳、身も溶ろかさんばかりの美しい微笑、蔦丸は思はず手にした桶を落した、雪の如き白い波れの顏には潮の如くに紅が漲つた、彼の少女は小雪といふ鹿の瀨の里娘であつたことは後になつて判つた

蔦丸の溫泉汲みは毎日續けられた、併し歸りは何時も遲れ勝になつた、或日の如きはもう黃昏の近づくことさへあつて城主の御入湯も間に合ぬこともあつた、併しもう其時の蔦丸の胸には主人の病

氣平癒の願は、美しい小雪に逢ひたい戀にと姿を變へてゐた

城主の病氣はまた逆戻りして日增しに惱みが募つて來た、近侍の人々は再び憂愁の雲に鎖された、夫と共に蔦丸の素振が怪しく思はれてならなかつた、そこで或日の事一人の武士が見えつ隱れつして忍び來たことは蔦丸は夢にも知らない、小雪はあの若葉の蔭美しい岩角に物思はしげに自分を待つてゐて吳れるに違ひないと、心の急がる彼れは獵の如くに斷崖を降つていつた

其翌日から蔦丸は監禁を仰付けられ今迄の目出度い御覺も消えた、日毎に增す小雪戀しさに一人暗い冷い室に泣かねばならぬ身となつた、一方また待つ蔦丸の優しい姿は見えもせず、怖ろしい荒くれ武士の溫泉汲みに來るのに、小雪の小さい胸は轟いた、待つ日も待つ日も其人は見えず、空しくゆる想ひを懷いて其儘家へと歸る小雪の嘆き、何とて熱い涙の頰を傳へずにはゐられやう、聞けば可愛い蔦丸樣は一歩も城外へ出ることが出來ぬとやら、さらば妾から訪ねやうか？……併し若い女……殊には監禁の因を作つた妾……何でおいそれと逢はせて吳れやう……と言つてこの儘逢はで

一時も堪えぬ今の身、小雪は千々に思ひ亂れて姿の日々にやつれ行く自分を見いつてはよゝと泣いた、狐戻し城の城門は常浪に面して嚴めしく聳えてゐた、此城に入るには此正門と先の斷崖の二つしかなかつた、若しそれ鼎鱗山の峰續きに登つては、奇岸峭立して狐さへも戻らねばならぬといふ斷崖絶壁

時は秋、鼎鱗の岩山は楓の黃に彩られ、澄み渡る紺壁の空には果敢ない人の世の姿のうつらうかと思はせる夜が訪れた、其秋の或晩であつた、山國の月は凄いまでに冴えて雲かと疑はるゝ明かるさ夜も大分更けたらしい狐の鳴き聲も絶えた頃、この鼎鱗山の峰續き……所謂狐戻しの險を這ふやうにして歩き來る人の姿、靑いまでに白い顏には艶と言はうか凄と云はうか、これ小雪か今宵こそはと世にも恐ろしい此の懸崖を傳はつて城へ忍び行くのであつた、可弱い乙女、この眞夜中、この斷崖、一歩を踏み誤らば身は果して何うなるであらう、千尋の谷は鬼氣颯々世にも物凄い暗さに沈んでゐる

翌朝溫泉汲みに下つた武士は、懸崖近くの岩角に見るも慘しい女の屍を發見した、蔦丸が城を拔け出て矢張狐戻しの險から身を躍らせたのも夫から幾日も經たなかつた

城主の病氣は其後間もなく全快した、天正十七年久々に出陣して遂に磨上の役で戰死したのは、蔦丸小雪の亡くなつた翌年の夏の事であつた

御廟山

源三位頼政が以仁王を擁し奉て宇治川に戰つた一戰は種々の哀話を殘した、頼政自刄したといふ宇治川の扇芝に吹き瓦る風や夫何にをか傳ひるであらう、治承の役の終るや一説に頼政の子仲綱が以仁王の御父高倉天皇を奉じて北國へ落ちたと傳ひられあるのであつた、雲のよの御尊さを以て草深い上野國より越後の國へと落ち給ひ南蒲原は吉ケ平に暫く御足をとめさせられた、天皇の御住居あつた御所平山から近くの朝草山を御覽になり

富士を見ぬ人にせばやみちのくの朝草山の雪のあけぼの

と歌はせられたと傳ひられ近くには仲綱の墓だと云はる塚さへ殘つてあるであつた

仲綱に別れたまへてからの天皇は吉ケ平の地を御出立になり、東蒲原は小川の村へお出でになり遂に其處に悲しみ多い一生を終らせ給ひたのであつた、今も小倉嶽に天皇の陵とて二間四方もある塚の上に栗の老樹と繁つてゐる所が御墓であると云はれ里人は御廟山と名づけてゐる

近くには天皇の御所跡なりと云はるゝ方二町ばかりの平地もあり、また其近くに二十餘の塚があるこれは天皇に供奉した人々の墳墓だといはれてゐる、小倉嶽の東に百八燈山といふ山がある、この山に里人は百八の燈を點じて天皇を慰め申したと云はれてゐる

妙法の石

三島郡島田村字妙法寺といふ所に同じ名の妙法寺といふ法華宗の大伽藍のあることはよく人の知つ

てゐる所である、其妙法寺の寶物に小さい石かけがある、その小石には一つの傳說があるのであつた日蓮上人がこの村に教を弘めに來られた時、丁度一人の山伏も亦法を弘めに來た、其處で村人は衆議の上、上人と山伏と術を競ふて勝つた方に就かうと定めた、山伏は早速傍にあつた幾百貫の石を指して「拙者はこの大石を空高く上げて留て置いて見せる」と云ひながら、何にやら口の中で呪文を唱へると件の大石は、大空に舞上り米粒のやうになつた、次に上人は村人に向つて「愚僧は彼の大石を空より落としてみせる」と云つて從容として珠數を爪繰ながら、經文を誦し印を結ばれた、と思ふと空中に絹を裂くが如き音がし、米粒のやうな石は次第々々に大きくなる、石臼程になつたと思つたら忽ち大地へ落ちて、め入るやうな大音がした、村人は皆目をつぶつて地に伏した、やがて目を開いて見ると山伏は氣絶し大石は影も形も見えなかつた、夫て村人は一同揃つて法華宗になつた、そして山伏の側に落ちてゐた大石のかけらを拾ひ取り、其處に寺を建て、其石かけらを寺の寶物としたといふことである

千本の赤池

三島郡入積村と云へば關原からまた奥、宮本の續きで刈羽郡と殆ど境になつてゐる村である、其大字村の小字に千本といふ山里がある、其の山里に一つの池がある、周圍には雜草生え茂り見るから物淋しい池である、土地の人はこれを赤池といつてゐる

赤池は天正年中或秋の世、俄に出來たものだと傳へられてゐる、其池の主は赤牛であると云はれ長閑な晴渡つた日などは池邊によく赤牛の臥して居るを見受けると云はれてゐる、村人はこの赤池に對しては敬虔の念を有つてゐる、そして夏の日旱魃の折などはこの赤池に祈れば降雨忽ち至ると信じられ、千本ばかりでなく近在からも祈りに來るといふことである、そして若し其池に塵や埃を投棄つれば池の水が忽ちに荒れ近くの田畑を荒すといふことであつた

田中の蠶石

北魚沼郡の田中の村端づれに一宇の堂がある、あたりは杉や松が鬱蒼として茂り盆踊には村の若い男女が踊りの太鼓なども聞ゆるといふ所、其お堂に一つの石が安置せられてある人はこれを蠶石と云つてゐる、蠶石には傳說があるのであつた、話は古いことであつた、同村の或女が養蠶をはじめたが中途に桑が堪えて何んともすることが出來なかつた、一眠から二眠、三眠までもすまして休は益々太り〻今二三日に巣にもつかんかと思はるゝ矢先この桑のないのには何んともすることは出來なかつた、女はみす〳〵殺すよりも一層の事川の中へでも投じて終はゞと其蠶を破間川の激流に投込んだ、逆捲く水に蠶は呑まれて浮きつ沈みつ流れ〳〵てしまつた、おなじ郡の三淵澤村の農夫が或日破間川筋の樽ヶ淵といふ所へ出てみた、然るに其の岩上に殆と生きてゐるかと思はれる蠶が重なり合つてゐた、近づいてみると夫は蠶の化石であつた、農夫は驚き夫を持歸つた、これが田中の

蠶石の由來であつた、何んでも此の蠶石を同村の五十嵐某が上京の際持行き大覽に供し「日本一蠶蛹石大明神」の宣下があつたと云ふことであつた

蛇山の四塚

上越線も近くに開通せられた、宮內、小千谷間に六日市驛が設けられたことも新聞に見えた通りである、其の六日市蛇山の村へ入ると瀧谷から入會の枝を四つ塚と云つてゐる、四つ塚といふ地名の起り……夫には矢張傳說があるのであつた

昔この里に三宅長者とて近鄉きつての大金持があつた、夕日に照さる土藏の白壁にも長者の榮さが偲ばれた、長者には僅か只一人の娘があつた、百萬長者に只一人の娘、可愛がられずにゐられやう筈もなかつた、或夏の日であつた、其の長者の娘が近くの野邊を散歩した、すると途の傍に大きな蛇に蛙にナメクジとが睨み合をしてゐた、娘は一旦は驚いたがまた此の儘にして置いたら三匹のも

のは共倒れの運命に陷るに相違ない、助けてやらうと口に大壽を共に全うせよと唱へた、蛇は其の儘歸つた、然るに殘つた蛙にナメクジとは何にか牒合つたもの、如く突然娘に取掛つて來た、娘は逃げるにも逃げられなかつた、其の時先の蛇が何處からか現れ來て蛙とナメクジに向ひ、三匹は遂に共倒れに倒れて終つた、娘は命は助かつたものの家へ歸つてから虫の毒氣が障つて遂にあの世の人とならなければならなかつた、兩親の嘆き……夫ははたの見る目も氣の毒のものであつた、さるにも彼の蛇の可愛らしさ、いぢらしさよと娘と蛇との屍体をならべて埋た、里の人はまた後の世の祟りを恐れ蛙にナメクジの亡き屍も近くに埋め女塚、蛇塚、蛙塚、ナメクジ塚と云ひ併せて三宅の四つ塚と云つた、星移り月變つて三宅長者の家も今ぢや跡方もないものになつた、殘るは只里人の云ひ傳へらる傳說のみである、蛇山の名は蛇の寵あるに感じ里の名にしたものだと云はれてゐる

岩の掛橋

石地の羅石樣といふと殆ど知らない人もあるまい、其羅石樣祀つた羅石堂近くから巖石が海中に突出してゐて一寸遠くからみると波止場のやうに見える、土地の人々はこれを岩の掛橋といつてゐる此の岩の掛橋には傳說があるのであつた、昔、昔、其また昔の話、羅石明神かどうかしても、越後と佐渡と連接したいものだ、そして兩國民の便利をはかつてやりたいものだと考えた、夫で多くの眷族を集めて相談し、いよ〳〵工事を始めることにした、晝は人目につくとて夜はじめては明ける前には引上げた、工事は大分進んで來た、然るところ眷族の一人に「アマンヂヤク」（天彦また山彦）といふ怠り者があつた、毎晩毎晩の骨仕事にすつかり厭氣をさし、或晩鷄の鳴く眞似した、すると明神初め諸々の神樣達は欺かれて姿を隱した、それから明神は二度と姿を現さず、折角の掛橋も出來上らず、本の一部分が殘つてゐるばかり、今の石地の突き出た岩は夫であるといふのである、葛

城の傳說其儀ではないがよく似た話しである

都婆の松

北蒲原郡の分田に都婆の松といふ枝振面白き老松がある、昔親鸞十人巡歷の際費食の箸を記念として立てられたのが、自然に枝葉を生じ一樹の松となつたのである、その幾星霜を經た或年京都本願寺の建築工事のあつた時一人の女が飄然として工事場へ姿を現し『妾は越後分田の松女と申す者でありますが』といひつゝ工事を助け歌を唱つた、それが爲め工事も捗どり僅か三十日ばかりで目出度く竣工した松女の姿はその日から見えなくなつた、寺の坊さんは松女の親切功勞を思ひ何んとか謝禮したいものだと思ひ、わざ〳〵越後に下り分田村へ訪ねたが誰一人松女を知るものはない、然るに不圖村人の口から不思議のことを聞えた、それは都婆の松か恰も工事の始め頃から約三十日に亘

つて滴る綠の松が俄に凋落し、殆ど枯れ木のやうであつたといふことである、それを聞いた寺僧さては松女はこの都婆の松の精であつたかと、直ぐに石に梵字を刻つて松の根本に納め懇に回向し他へ立去つたといふことである

岩の室屋

東蒲原郡東川村の方安堂に弘法大師の洞穴といふのがある、この村の軒の端から山になつてゐて大きな峠が直ぐ側にある、その峠は九歲の時に此處を越えられたとかで九歲阪峠といつてゐる、大師は村端づれの岩山に洞穴を作り、其處にすんだ、その後大師は土地を開き四十八の大澤を堰止め、川の流れを定めて一帶の沼地を切り落とされた、高野山は四十九澤で天下一の處、此處は今一澤で高野山とおなじになるといふ、今は其處に大師を祀り御籠もりどかいつて村人が寄合つて祈念する處になつてゐる

三盃池

二三年先の夏であつた、長岡市内神田の安善寺の庫裡で和尚さんの御馳走になつた事があつた、其時裏庭の欅林を指して此前の或朝早く起き出てみたに白狐が木の上に姿を現してゐたと云はれた安善寺の欅森は隨分鬱蒼たるもので成る程狐の一匹や二匹は出るかとも思はれないでもない、この大正の世に人家近く現れるとは不思議に思はれずにはゐられなかつた、すると和尚さんは、何に昔は此邊一体はじぶ〳〵した池であつて狐の巣窟であつたと云はれた、自分は成る程と思つた何んでも昔はあの邊一体は蘆や葦の生えた濕々した沼地で、其處には毒蛇が住んでゐたといふことである、そして其毒蛇に斃さるゝものが毎日のやうにあつた、享保の頃長岡藩士に山本某が藩主の命を受けて毒蛇を退治して其の難を救つた、その退治の時は一通りの事ではならぬとて池をはたから埋ていつた、これには流石の毒蛇も如何ともする事が出來ず、遂に毒を吐いて斃れて終つたといふことである

其後池は小さくはなつたがまだあの邊一体は沼地であつた、そして毒蛇の毒氣が未だ絶えぬのか其沼の傍に『サンバイ〳〵』と唱ひれば池の面は忽ち荒れて水底からがぶ〳〵泡が湧いた、三盃池は夫から名づけられた名であつた、三盃池も今ぢや跡方もない、只安善寺一体から西神田へかけて土地何んとなく濕潤なるのが僅かに昔のおもかげを偲ばせるばかりであつた

泣き佛

親鸞上人が越後へ流されたことから上人に關する傳説が却々に多い、彌彦神社の神職高橋家にある『泣き佛』もまたその一つであらう、絶海の孤島の如くに當時の人に思はれた佐渡に永い間だ流罪の苦を嘗め、再び越後の地を踏んだ時には流石の上人も初めて人心地がした、しかし永い間の苦難の日を過ごして來た上人は痩衰ハて歩行にさへ困つた、今日は一里、明日は二里と疲れた足を引きな

がら新潟から濱傳ひに歩いて來た、彌彦へ着いた時にはもう山上とも歩けぬまでに疲れてゐた、高橋家へ着いたのは其時であつた、高橋氏は心を盡して優遇した、上人は同家の心づくしを心から嬉しく思つた、數箇月逗留した上人は再び都へと發足することになつた、この時上人は形見ともお禮ともとて同家に置いていつたのが佛像であつた、高橋氏はこよないものとて日夕崇拜してゐた、ところが或日近くの寺僧が來て其佛を持つていつた、ところが其の晩その佛が『舍人へ行かう、舍人へ行かう』と泣くので僧は大いに驚き、早速翌朝高橋氏へその佛を戻した、舍人とは高橋氏のことであることゝ勿論である、泣き佛はさうした傳說を有つてゐる佛像であつた

袍衣姫權現

米山峠の險道は今は通る人とてはあるまい、今ぢや八つの隧道の間だに北海の宵波を眺めやりながら通過ぎてしまふといふありがたい世の中、なんでも昔は鉢崎に代官があつて、其處で旅人は一

誰何せられたといふことである、鉢崎の町を端づれると道は直ぐに爪先上りに上り、いよ〳〵上り詰めると日本海は一眸の裡におさめらるゝ天下の絶景、何人も快哉を叫ばぬ人とてはおるまい、その途をうねり〳〵の右手と行く山上に袍衣姫神社があるのであつた

袍衣姫神社は源義經の奥方が夫義經の北國落しの後を慕ひ身重の身体を運ばせながら、此處まで來た時、俄に陣氣づき玉のやうな子を生み落とされたと傳へられてゐる、社には義經はじめ辨慶の所持品だといふものが藏せられてあるさうである

袍衣姫神社の下には茶屋がある、茶屋は辨慶茶屋と云はれ、茶屋に賣らるゝ餅は力餅といはれてゐる、その力餅の緣起を唄つた歌は國上の萬元律師の作であるといはれてゐる

話しは變るが昔この米山に米山お六といふ女賊があつた、日々毎日賭博に耽り、また兵隊を通る旅人をお脅したりしてゐた、そのお六は重にこの袍衣姫様の近所に出沒してゐた、初めこの社近くに巢窟を構ひてゐたが、神威恐ろしきこと度々あり、遂に山奥へ引込んだといふことである、袍衣神

姫社はお産の神様として參詣者は常に絶えないのであつた

八箇峠の怪物

十日町から南魚沼の六日町へ越えるに八箇峠といふ峠がある、うねりくねりと曲り曲つた道は隨分長い峠であつた、天保年中の事であつた、十日町の縮問屋の七助といふ男が掘之内の縮問屋へ白縮を屆ける爲めに或夏の日八箇峠にかゝつた、もう二里も歩いて頂上も近きあたりへ來た時、七助は一服喫ふと路傍の石に腰掛け、序に燒飯を食つてゐた、すると谷合の根笹を押分けて七助に近づいて來るものがある、何物だと七助目を瞬ると、こは如何に猿に似て猿に非ず狼に似て狼に非ず、顏は猿のやうなれど赤く、はなく、毛は娘のやうなれど狼のやうに憎らしくはない、七助も用意の刀を構ひて向つたが怪物は何等の危害を加ひる樣子もなく、石上の燒飯を與へくれと願ふの樣子であつた、七助はそこで燒飯を與へやつた、怪物は嬉々として夫を喰つた

七助はまた荷物を脊にして歩かうとした、怪物は其荷物を自分に借せ、運びやらんとするの樣子をした、七助は彼の思ふまゝに荷物を渡した、怪物は喜んで其荷物を持ち七助に從ひ來り、峠の麓まで持ち來り、荷物を置いてまた峠の方へ走り行つた、七助は一飯の恩に感じてか荷物運んでくれた怪物の心を不思議に思つた

不出ケ澤

妾しや三國の淺貝育ち米の生る木をまだ知らぬ

越後から上州へ越える三國峠の山腹二十戸に足らぬ寒村淺貝村の荒涼は右の唄にて想像せらるゝのであつた

淺貝の手前に二居といふ寒村がある、二居と淺貝との間だ約二里その間に不出ケ澤といふ澤がある昔はこの澤の奥には妖怪頻りに出沒して人畜を害した、一度此澤へ入つたものは二度と出て來ない

といふ所から、不出ケ澤の名が起つた、當時の地頭の某かその澤の入口に標札を建てゝ注意してからは　世にも恐ろしい魔所として人から人へと噂せられた

寶永の昔であつた、長岡の牧野駿河守忠辰公が江戸參勤の途中に此處へ通りかゝり、建てられた標札をつく〴〵眺め駕籠の中から『誰かある、この澤に入りその怪物を見屆け來るものはないか』とお聲をかけられた、そのお聲で行列は停まつた、近士の千本木源太兵衛、大平圭兵衛の二人は進んでその見屆けの役をひ請ひ願つた

許しを得た二人は山澤深く分け入つた、老樹森々として陽を遮ぎり、澤を流る山川の音は世にも物淋しい、二人は進み進んだ、處々老樹の打倒れてゐた、奇石怪岩が轉げてゐた、然怪物のそれらしいものは一つも目に當らなかつた

二人は歸つてその樣を申上げた、駿河守は二人の忠勇を嘉された、不出ケ澤も其後樵夫も入るやうになつた、不出ケ澤については長岡の古老に知つてゐるものがまだあると云はれてゐる

小更の池

浦村の鐵橋を渡つて來迎寺の停車場へ着く手前一体水田連らなり小池點々、池畔翠柳枝を垂れ池には澤瀉花を開きあるなど汽車の窓より望み見られる、昔はあの邊一帶は大きな池であつたものであつたか、月變り星移つて今では美田良甫となり、只僅かに小池が一二殘つてゐるばかりである

其小池の中の稍大きいものを小更の池と云つてゐる、この小更の池には哀話があるのであつた

大館といふ男は南朝の忠臣であつた、その大館の北の方に小更の前といふ美しい女があつた、南北朝の爭ひは哀話悲話を無限に造つた、大館氏も亦その一人で美しい小更の前を殘して討死にした、悲嘆の涙にかき暮れた小更の前は一子竹若丸を懷いて北國の越後三島の片貝の城主片貝氏を賴つて來た、地内に家を建てそこに小更の前を隱してやつた

前には一人の忠僕が隨へ來た、沼野と云つた、然るにどうしたことか沼野は小更の前の容色に思

ひを焦がし、一人胸に包んでおかれなかつた、彼れは遂に小更の前に胸のありたけを述べた、然し前は夫を許すべくもなかつた、可愛さの反面は憎さであつた、沼野は日となく夜となく小更のの前を虐めた、前は我が子を抱いて一人人知れず泣いたことは幾度あつたことであらう、其淋しさ、我子を抱いて近くの池に身を投じたのは夫から間もない話しであつた、前は二十二歳竹若丸は二歳であつた、小更親子の死は沼野をして悪夢を覺させた、彼れは悔悟の涙にかき暮れ懺悔々々の間に其日を送つた、今も浦村にある天滿宮の側なる塚は沼野が小更親子の菩提を弔つた塚で中にば寶器が埋られあると云はれてゐる、近くの長永寺には小更の前の所持したものだと云はれある五寸程の古鏡があるといふことである

とら池

岩船郡は神納村と云へば村上線で村上へ行く手前一里程の右手にある村、砂丘あり、砂丘には松あ

り松間民家點々、見るから平和らしい村であつた

其村の淸奥小松山と小松山との裾が相合ふ凹所に、世にも淸冽な泉が湧き方二町程の湖が出來てる四邊の小松翠の姿を其鏡に映し、水禽時に寂寂を破つて其處から飛立つこともある、實に淋しいとも床しい小さい湖、村の人はこれを『とら池』と云つてゐる

とら池には矢張り傳說がある、併も夫は古いものではなかつた、村の大屋に嫁入りがあつた、花の顏、玉の肌、世にも美しい嫁よと村人に噂せられた、嫁さんの名はとらといつた

何處にもよくある話しとらさんの姑は意地悪い女であつた、日となく夜となくさいなまるゝ嫁のおとらさんは身も世もない思ひに其はゝ々を過こしてゐた、併し姑の苛責は日に日に募つた、夫にも打開け得ず只一人苦しい思ひをヂツト堪えてゐるとらさんの眼には何時も露が宿されてゐないことはなかつた、若い身の一心に思ひつめた心程世に恐ろしいものはなかつた、或月のよい秋の夜とらさんは家を抜け出た、抜け出てとらさんの目は血走つてゐた、脛もあらはに歩くとらさんは草履も

つけずの素足、綠の髮も亂れてほつれは凄くも白い顏に振かゝつてゐた

とら池の水は恐ろしいまでに靜まりかへり、秋の夜を鳴き明かす虫の音も物凄いまで淋しい、とらさんが兩手を合せざんぶとばかりに白い軀を其の湖心に沈めたあとは湖はまた元の靜寂にかへつたとらさんの魂も軀も永久に浮ばなかつた、『とら池』の名は夫からの話であつた

壚入峠

三島郡與板町の後は直ぐに山續きで與板から寺泊、出雲崎の海岸へ出るには必ずその山を越えなければならなかつた、その山越しの峠は數澤山ある、その中に桐島の方へ越えるものは壚入峠といふのがあつた

壚入峠は里道である、上りドりは勿論大した里程はないが踏分けはしい所もある、爪先上りに上りゆく時は頭の上に突きゐるかと思はるゝ山白百合が、其處へ行までには却々容易ではない、夫程道

をうねりくねりと曲つてゐるのであつた、芭蕉がこの峠に通りかゝつたとき

眼の上に突く花遠き峠かな

と歌つた、尤も芭蕉の通つた當時と今とでは余程道も宜くなつてゐるに相違あるまい

良寛はこの壚入峠を越えてゆく向ふの麓なる桐島村にすんで居つた、今も良寛の墓はその桐島村にある、良寛はよくこの壚入峠をかけたことがあると見える、そして良寛の時代にこの峠が修繕されたことがあつたのか、良寛の遺稿にこの壚入峠のことを書いたものがある、何でもその書き出しが『鹽入峠の途こしらひたことを喜びて越の海かくたの朝の朝風にいさなひくみ夕なきに……』といふやうに記憶してゐる

壚入峠は世間では『しほのり峠』といつてゐる、何方がただしいのか自分は知らない、併し何故に壚入峠と稱するに至つたか其の峠の中腹に壚氣ある清水の滾々として湧き出づるより名づけられたことだけは事實である、山の中腹に鹹味ある水が湧くとは世にも不思議に思はれるのである、或人は

弘法大師が此處をお通りになつた時一旅人が病て路傍に倒れてゐた、大師は救ふに何物を有たなかつた、それて持つて居つた錫杖で地を穿つたら塊水が流れ出た、その塊水で旅人を助けてやつたなど云はるゝけれど勿論偽僞は分からない、傳說は只傳說として夫を傳ふることに於いて使命がある

御前ケ淵

岩越線を通るものは何人も阿賀川沿岸の風光に憧憬せぬものはあるまい、峨々たる兩岩の山、淙々たる阿賀の清流、春は花笑き秋紅葉乞ふ越後有數の勝地と云つてよい、馬下から汽車は上つて白崎驛へ着く手前に一寸した隧道を拔けるとすぐ汽車は鐵橋を渡る、橋下水漫々、藍を湛たえたるが如く、淵の上の岩山には滴る綠の松が面白く生えて世にも珍らしき景色、岩には白い札が立てられ墨黑々と「御前ケ淵」と書かれてある

御前ケ淵には勿論寃話がある、傳說がある、文治年中平家公達の逃れ〳〵てこの山深き越路まで落

ち延び白崎の里迄來た時武運果敢なくも源家の兵に捕はれた、公達の後から奧方が慕ひ尋ねて來た然るに白崎近くまで來た時、公達は源家に捕はれ、明朝鷄鳴を限りに首を刎ねられると告げたものがあつた、奧方の驚き悲しみ、玉のやうな足を急がせてやう〳〵阿賀川岸まで來た時鷄が鳴いた、悲嘆やるせなく奧方は遂に其身を世にも恐ろしい深い淵にザンブとばかりに投じた、「御前ケ淵」の名はそこから生れた、平家亡んで七百年阿賀の清流は昔の儘に流れてゐるか御前の芳魂は何處に漂ふてゐるであらう、白崎の村では今も鷄が鳴かぬやうになつたと云ふことである

舟岡山

長岡の人々が悠山久々々々と云つてるが如く、小千谷の人々は舟岡山を名所としてゐる、舟岡山はすぐ小千谷の町裏にある、遙か麓を流るゝ信濃川は銀蛇を走らし、對岸へ架けられたる旭橋も眼下に見下される、小千谷の人々が舟岡山々々々と誇るのも無理はない

舟岡山はその形舟をふせたが如くであるといふことからその名が起こつたらしいが、何んでも遠い昔石凝姥命卽ち船豐宇氣比賣命が此山に臨幸あつたと傳ひられてゐる

北蒲原郡金山村金山村にも舟岡山といふ丘陵がある矢張りその形舟を伏せたが如くで此處にも矢張船豐宇氣比賣命が天降つた所だと云はれてゐる

靜女の墓

古志郡栃尾の奥栃堀といふ村がある、其村に光德寺といふ、曹洞宗のお寺がある、寺は稍山の腰といふべき小高き所にあつて登る石段から、何處となく古寂て由緒ありげのお寺である、

その寺の山の腰續きに一堆の墳土があつて其上には風雨幾星霜、いとも古雅なる石碑が建てられてある、石碑の文字は勿論讀めないまでに磨滅してゐる、村の人、寺の坊さんは之は源義經の愛妾靜の前（靜御前とは別人、磯の禪尼の娘で志操堅い女丈夫であるといつてゐる人）の墓であるといつ

てゐる、何んでも義經が吉野山を落ちて北國へ逃遁びた時靜の前その跡を慕ひ遂に途を迷つてこの栃尾の山奥栃堀まで踏込んで終つた、踏み込んだ靜の前はその時重い病にとつつかれてゐた、肉の病に戀の病、靜の前は悶々懊惱の裡に若い身をこの北國の山奥に埋めねばならなかつた、石碑はその哀話を埋めた後人の印であつた

三島郡勝見の法持寺にも靜の納めたといふ佛像調度がある、兎に角靜の前が越後の地へ來た事は誠であらう

石芋と石胡桃

弘法大師の遺跡は隨分多い、其多い中には勿論牽强附會の說は多いが傳說には其眞僞に責任のない所に面白味がある

弘法大師が西蒲原の或村を通つた折から腹が空いたので畑に芋堀つてゐた婆さんに芋を所望した、

婆さんは意地の悪い女であつたのでこの芋は不味くて食はれないと云つた、弘法其儘通過ぎて行つた、婆さん家へ歸つてから芋を煮たが芋は石のやうに固くて食べられなかつたといふことである、

刈羽郡高田村大字新道にも夫に似た傳說がある、村の若衆が橋の普請をしてゐた、折から弘法は其處を通りかゝつた、若衆はわざと意地悪く通さなかつた、弘法はその儘其處を立去つた、其橋の袂には一本の胡桃が生えてゐたが其年の秋その實は皆石のやうに堅く、到底食はれないものになつてゐた、今でも其村に胡桃は育たないと云ひ傳へられてゐる

吉ケ平の池

南蒲原郡下田鄕奥にある吉ケ平池の傳說も隨分人に知られてゐる、吉ケ平といふは村の名で其村の山中に大池、丸池、馬追池といふ三つの池がある、夫等を總稱して吉ケ平の池と云ひ、傳說を有つてゐるのは其中の馬追池の事である

山湖と云へば何處も同じ周圍に山を有し、山には樹木鬱蒼として世にも物淋しいものであるが、馬追池も夫に洩れず藍を湛たえたやうな水の底には如何なる神秘と奇異とが藏めあるかと思はす程の物凄さ、何んでも昔此處へ通りかゝつた坊さんがあつた、坊さん懷に三つの寶を有つてゐた、即黃金造り藥師佛に鉦に鷄であつた、其邊に木を伐つてゐた樵夫が夫を見るや欲念一時に起つて到頭手に持つてゐた斧で坊さんを眞二つに割つて其三つの寶を奪ひ、坊さんの屍體を埋た、埋た其の地が忽ち池となり滿々として清冽の水を湛えた、馬追池はさうして出來たものであると云はれてゐる後の人其近くに社をたて馬追明神と改め云はるゝやうになつた

櫻て名高い鵜田川堤に三圍社といふ社がある、其社は彼の俳人其角の『夕立や田を三めぐりの神ならば』の句で有名の社である、永い間たの旱魃にこの三圍の社に祈れば雨が來ると云ひ傳ひられあるとおなじく、彼の雨追明神にも雨乞が行はれるのであつた、何んでもその時には池にゐる田螺を捕ひ來り社に供いて祈るとかで、若し其の田螺を誤り殺すことあれば神の祟りあると云ひ傳ひられ

てゐる、よく斯うした傳說には田螺を供物にするなどのことを云ふものである、彼の目の佛樣と稱せられある北蒲原郡黃谷の不動樣にもこの田螺に就ての傳說を有つてゐる

話は前後したが先に樵夫が奪ひ取つた三つの寶の中の金の鷄だけは其後紛失し他の二品は今尙大谷村の皆川家の什寶となつてゐるといふことであつた

小國の御陵

長岡を出た汽車が塚の山驛附近に至ると一本の川に沿ふて進む、その川は澁海川で、澁海川の上流に小國鄕といふ盆地がある、小國鄕は保苔之島に一基の墓がある、風雨幾星霜、石の碑文は見るべくもなけれど世間普通の夫とは趣きも違ふ、必らずや由緖あるものならんと何人にも思はれずにゐられない

傳ひ云ふこの陵墓は後醍醐天皇の皇子護良親王のものであると護良親王足利尊氏の讒奏により鎌

倉の土牢へ閉籠らせるゝに至つたことは世にも慘しい御話、併し朝夕讀經に身を委ぬる親王の身に尙も危害が迫らうとは、それは參氏の弟直義がその臣淵部義博をして親王を害し奉らしめんとした事である

傳說に親王はその場に救はせられ流れ〳〵て越後頸城の岡田の莊に至らせられ、遂には小國の鄕へお移りになり、其處にわびしい生活をお送りになつたが間もなく病に罹らせられ遂に稟去遊ばされた、小國の陵は卽ち痛ましい親王の御遺骸を葬り奉たところであると云はるゝのであつた、今も宮に隨從し來れる臣の子孫は今尙小國村に住まつてゐるといふことである

音羽の池

佐渡相川近くの村に長國寺といふお寺がある、そのお寺の寶物に鐙甲の櫛と鏡、帷子の袖とがある櫛に鏡に袖、何にか其處には女に就ての傳說がなければならない、昔長國寺の女中に音羽といふ耳

目よい女中があつた、或年お寺にお取越があつた、晉羽はそのお取越の御馳走にもとて、裏山へ蕨採りに出た、子供の拳のやうな可愛らしい形ちした蕨は夫から夫へと生えてゐた、晉羽は日の暮るゝも知らずに奥へ奥へと進んでいつた

日が金北山の峰に落ちやうとする頃、晉羽は初めて氣が附いた、そしてソコ〳〵に戻らふとすると着物の裾が赤く汚れてゐた、晉羽はその時身が不淨であつたのであつた

傍に湖があつた、晉羽はその汚れた裾を水に洗つた、池には主がゐた、夫が可愛らしい男になつて現れ晉羽を妻にと强ひて望んだ、晉羽は凡てを因緣とあきらめて其の湖の主と共に湖心深く花の如き美しい身を沈めてしまつた、鼈甲の櫛、鏡は晉羽の形見として湖邊に殘されたものであると

靈鷹の湯

松之山溫泉が開かれたのは何んでも正平の頃、即後村上天皇の時代であると傳ひられてある、世

は南北朝の爭ひに今日は東に明日は西にと弓矢の爭ひに餘念もないのに越の山奥には浮世を外に毎日晴渡つた碧空を渦卷いては山の何處へか降りる鷹があつた、

松の山には一人の獵師があつた、毎日弓矢を持つては野山を駈つて獲物を探してゐた、或日の事であつた、獵師は何時の如く此處の山か彼方の野へと兎や鹿を追ふてゐた時、思ひがけもなく一羽の鷹が木蔭に影を潛めてゐる、併も其鷹は世の普通のものとは異なり何處となく尊げにも見られた獵師は其儘家へ歸つた、其翌日また昨日の所へ行つた、すると不思議にまた鷹がうづくまつてゐた獵師は不思議でならなかつた、さうした日が幾日も續いた、或日の事鷹は思ひつけもなく飛上つた獵師は其跡へ行きみればこは如何に溫かい湯が滾々として湧き出て居るのであつた、

鷹は脚に傷を有つてゐたのであつた、其傷を癒す爲めに毎日其處へ來てゐたのであつた、獵師はこれは神が鷹の姿に變へてこの靈泉を知らしたのであると思つた、

松の山溫泉は夫からはじまつたのであると傳ひられてるのであつた

北陸の宮

治承の年の宇治川合戰は世にも慘ましい戰ひであつた、金枝玉葉の身の以仁王も寄せ來る平家の軍勢を如何ともすることが出來なかつた、味方の大將源頼政は遂に恨み流るゝ宇治川を前にして腹を掻切つて死んで終つた、以仁王も遂に流れ來る矢に額を射られて遂に無念の最後を遂げさせ給ひしと歴史は傳ひてゐる、

然るにまた一說を傳ひるものがある、夫は以仁王は頼政の子仲綱はじめ渡邊競ふ、猪乃隼太等の一族を引連れて北國へ落ちた、落人の悲哀は人の想像以上のものがあつたらう、殊には浮世の風も知らせ給はぬ宮の御心の中は什麼であつたらう、歩みも慣ぬ足を運ばせて八十里越えかけさせられ、蒲原郡五十嵐牡の五十嵐小文四をたより中山の里へと落ちさせられた、村松の裏一里ばかりの地に早出川といふ綺麗の川が流れてゐる宮は其邊に來給ひし時附添王妃の月滿ちて玉のやうな王子を産

げさせられ其早出の川水で産湯を使つた、春風秋雨幾星霜、世は移り變つて終つた、後の世の人々相語つて此痕蹟を殘し置かんと石碑を建たが其所在が明でなかつた、夫が嘉永年間に漸く發見せられ、今は中蒲原郡木越村日枝神社の境内に安置せられてゐる、碑面磨消して『從位宮』の文字が分るばかりである、木曾義仲の平氏を打つや北陸の宮を奉じ云々と歴史は傳ひてゐるが、其北陸宮とはこの以仁王の北陸へ落ちさせ給ひた時の其御子であると云はれてゐる、

正續寺

北蒲原の新發田から東蒲原の津川へ至る津川街道は、新發田の街をはづれるとすぐ杉の並木で、彼の新發田中學校は其木の間だに隱見せられる、其並木を通り尙も東へと進むと米倉村へと入る、米倉村には世に物寂た一宇がある、正續寺と云ふのは即ち夫であるのであつた、正續寺は曹洞宗のお寺であつた、朝夕勤行の鉦の音木魚の音の洩る時、何か由緒ありげの寺にも思はれるのであつた、

話は昔へ遡るが後醍醐天皇の建武中興の際大忠臣であつた藤原藤房は遁世京都花園妙心寺に入り關心惠玄師によつて剃髮し、心もそまらぬ墨染の衣に身を包心を谷川の水に澄ませて餘生を送つてゐた、後に後醍醐帝其由を聞し召され藤房の父の宣俊を使ひとして藤房を召させられた、藤房は

住捨てる宿を何處と人問はば嵐や庭の松に答へん

と一首の歌を殘して越前の鷹巣山に隱遁した、然るにまた〳〵新田義貞の臣畑六郎左エ門に訪れられ此處もまた

浮世の人の訪ひ來れば空ゆく雲に跡をとどめん

と書殘し越後に移り先に云つた正續寺に入つた、正續寺はさうした由來のあるお寺であつた、藤房がこの寺に居つたは彼是五ケ年後また國亂れて秋田へ去つたと云ひ傳ひられてゐる、

間遠の渡

信濃川も西、中蒲原の村々の岸を洗ふ邊は流石に溶々たるもので、兩岸蘆荻茂り行々子其間だに日ねもす啼く、白破風を孕んで上り或は下る確に一幅の畫たる感がある、中蒲原の鳥野野といふと人は直ぐあの逆竹のある所かといふ、實に逆竹の鳥屋野か、鳥屋野の逆竹かと云ふ程有名ののものになつてゐる、併し今日これから書くのはその逆竹の事ではなくて間遠の渡の事であつた、間遠の渡とは鳥屋野の村から向ひの西蒲原の村への渡である、蘆荻簇々其間を一竿の棹にてこの岸より彼岸へ渡る渡船は世にも長閑の姿である、昔順德天皇佐渡へ御流され遊ばされた時この渡へ御出になり『間遠なり』と宣はせ給ひてか間遠の渡の名が生れたのであつた、俳聖芭蕉も此處へ來り、感慨無量

直に一句を

船の中に眠る間遠の渡しかな

と詠んだ

信濃川は順德帝の時も芭蕉の時も今もおなじ姿に流れてゐる、只變るものは移りゆく世の姿である

沖見嶺

信越線の通ぜぬ前の長岡柏崎間の往來は實に千辛を極めたもので、それこそ絡驛として繼るが如しといふ有樣であつたのであつた

長岡から關原、關原から宮本、宮本から西山を越えて妙法寺に至る嶺を、沖見嶺といふのであつた（新街道を曾地峠と稱し油田を通らぬものだ）

沖見峠は實にうねりくねりと曲つた峠でてる、所謂羊腸たる小徑とでも云ふべきであらう、其峠をあいぎ〳〵登つてゆく旅人は愈々頂上へ近り着いた時のうれしさは如何ばかりであらう、殊には日本海の青波手に取るが如く、白帆のどかに行き交ふあたりは目も覺むるばかり、明應年中紫屋軒宗

長がこの峠に登つ時その絶景に見惚

眞帆片帆沖見の浜に見渡せば旅寐の憂ひも忘れこそすれ

と讀んだといふことである、又例の僧良寛が此處を通かゝつた時太い聲で

霞たつ沖見峠の岩つゝじ誰かおりそめし唐錦かも

と詠上げたと傳ひられてゐる

沖見峠も今ぢや通る人とても殆と無い、沖見峠どころか新街道である曾地峠も今ぢや草茫々、行く人殆と稀に、沿道の人家また愈々荒廢、ましては沖見峠の絶景も今ぢや知る人とてもあるまい

七つ釜の瀧

信濃川も信越の國境近くなると兩岸山峙ち、水勢急にして射るが如くに早い、その國境近くに清津川なる支流が入る、清津川は山川である、千々の晉立てゝ流るゝ水は世に淸冽なものであつた

清津川を溯り二三里も山奥へと入れば兩岸奇岩峙ち、鬱蒼たる樹木は陽の光りさへ透かさない、岸を嚙み岩にせかるゝ水の音は世にも物凄く、一條の注連の川に張られあるよりしても、其處には神秘の何物あるを思はせずにおかない、

七ツ釜の瀧とは即ち其處であつた、上より落つる水の淵となり、その淵の水落ちてまた淵を造る、層々重なる瀧壺實に七つ、水は蒼々として底さへ見えぬ物凄さ、其處には大魚細鱗群をなして泳いでゐる

昔中魚沼郡馬場村の豪士に太田新右工門といふ男があつた、或日殺生禁斷のこの釜に網を投た、網にかゝつた魚は數知れなかつた、新右工門はまたもとて網を投じたに、網は何うしても上らなかつた、新右工門は短氣であつた、手に持つた銃にてその釜の中へ彈を打込んだ、すると釜の底より鮮血見る〳〵湧き上ると見るや、一天俄に掻曇り烈風迅雷、四邊は暗黯として物凄く、雷雨霹靂新右工門は網を投棄て鼠狐々々に逃歸つたが青氣に觸れた新右工門は到頭死んでしまつた

七つ釜にはさうした傳說があつた、新右工門が死んでから最早再び釜に網を投するものはない

姨ケ井

長岡の人は勿論、信越線に乘るものは何人も長岡の西方に連亙せる山々を見渡すであらう、其の山の中に只一つ山上に樹木鬱蒼として遠く望めば扇を開いたが如き山がある、之が小木の城といひ上杉謙信時代には松本左馬介なる人がその城主として四隣を治めてゐたのであつた、今も小木城の麓一帶の村に松本性の人多いは其の松本氏の子孫であると云ひ傳ひられてある、話しは横へ入つたが其の小木城の麓に蓮華寺といふ小さい村がある蓮華寺村にうばケ井といふ井がある、今は附近荒廢慘しい哀話を其井に秘めてゐる、松本氏には一人可愛がつてゐた男の子があつた、蝶よ花よの譬へも古めかしいが下へも置かぬ家の人々の寵愛を集めた坊ちやんが或日うばに脊負はれて園外を逍遙してゐたが何うしたはづみか脊の子供を近くにあつた井の中へ落してしまつた、うばの驚き、悲し

み、口にも筆にも現されなかつた、可愛坊ちんを井戸の中に落して何んで自分一人オメ〳〵生きてゐられやう、うばは身を慄へして自分も坊ちやんの後を追ふた二人の生命を呑んだ井はまた元の靜けさに靜まり返つた。其後人が其の傍に寄り『うば』と呼ぶ時には井戸の底よりは泡か沸々として湧いて來る試みに『兄』だの『妹』だのと呼んでも何等の反應はないと云はれてある

人魚塚

米山のトンネルを通過ぎれば海岸は磯濱砂濱、續く桑の松原は越の三保の松原かとも思はす風情、其松原の中にある漁村が潟町、其潟町に人魚塚があるが、其塚には世にも哀れなローマンスがある

『來いと云ふたとて行かりようか佐渡へ佐渡は四十五里波の上』と唄にはうたへど四十五里の波の上を夜毎に通ふ佐渡の女があつた、夜毎舟に乘つては越後の男に通つた語る逢ふ瀨もほんの束の間鷄鳴曉を告ぐる前にはもう佐渡の女は歸らねばならなかつた、女が潟町の明神樣前に臨ぜらるゝ

常夜燈を目あてに越後に通ふ雨の日雪の日、男は初のうちこそ戀し可愛しにお互の逢ふ瀨を樂んだものゝ、後には女の其强い情が空恐ろしくなつて來たと同時に、何んとかして女に離れることをと考えた、併し變らぬものは美しい女の心、佐渡の女は今夜も常夜燈目あてに佐渡の磯邊を乘出した、越後の男は意地惡くも常夜燈を吹消した、夜は暗憺として沖には波の音ばかり

翌に明神下の磯邊に一人の女の屍が漂つて着いた、夫は佐渡の女であつた、丈なす絲の髮は振亂れて白い顏にフワリ〳〵と流れかゝつてゐた、夫を見た越後の男は今更に自分の薄情を怨んでも仕方のない話であつた、男は間もなく死んだ、人魚塚は其佐渡女の屍体を埋た哀れの奥津城である

應化の橋

荒川も直江津の河口近くなつた邊は流るゝともなく流れ、ゆるやかに日本海に入る、直江津から春日新田の方へゆくには何うしてもこの荒川を越さなければならない、今は大小の橋が三つも四つも

架けられあるが昔は只の一つ、其橋の名を應化の橋と云ふた、

應化の橋も今ぢや路驛の名ばかり殘つた今日では、杭ばかりは夫でも朽殘つて水底にあるなど土地の人に云はれてゐる、永保の昔であつた陸奥の國岩城の領主に岩城判官正氏といふ人があつた性來の律義から遂に上司のものゝ機嫌を損じ遠く西國に流さるゝことになつた、正氏には妻の宇和竹と安壽といふ娘と津志王丸といふ二人の子があつた、國に殘された三人の妻子は父戀し夫なつかしさに淋しい悲しい日を送つてゐたが宇和竹は遂に一人の侍女と二人の子供を連れて北の陸奥の國を出立し、可弱い足に幾百何里の山河を運ばせて遂にこの應化の橋へとまで辿り着いたのであつた、

父戀し夫慕しさとは云ひ可弱い女と子供の足に幾十百里の道は無理の話してあつた、四人はもう疲れに疲れてゐた、路用の金とても微淋しくなつてゐた、疲れ果てた四人は遂に應化の橋の上に思はず臥居してゐたのであつた、

直江津町に山岡大夫といふ惡人があつた、大夫が商用あつて應化の橋に通掛つた時橋上に此邊に見

受けぬ美しい女を見た、姿こそ窶れ居れ何處となく備はる品格は流石に爭はれなかつた、大夫の胸には直に惡計が廻された、そして親切こかしに四人を我家へ連れ歸り歡待した、歡待は幾日も續いた、或日大夫は慇々船も用意出來たれば丹後の方へ出帆致させ申すべし、舟二艘なればと親切に云つて呉れた、母子は心から大夫の親切を感謝したのであつた、慰待たるゝ其日が來た、母と侍女とは一つ舟、子供二人は一つ舟に乘つた、直江津の港かだん〳〵小さくなつて見える頃になると宇和竹の乘つてる舟は方向を變じて佐渡の方へと向つた、

母の驚き子供の悲しみ、さては大夫の奴、妾を佐渡へ賣らんとては斯くはなしつるかと怒れど叫べど最早その甲斐はなかつた、我子等が乘れる舟と別れてだん〳〵小さくなりゆく時の悲しみ嘆き……宇和竹は遂にまだうら若い身を以て荒れ狂ふ浪の中へと身を躍らせた

安壽と志津王丸は夫でも無事に丹後へ着いた、併し母人に別れた悲しみ小さい胸から消ゆるべくもない、西國へ流されたといふ父にも逢はれなかつた、姉弟は相抱いて泣いた

丹後に賣られた姉弟は其の主人の山椒太夫の手元から逃げたのは余程後の話であつた、そして志津王丸は事の顚末を天皇に奏聞し運開け家を興し富榮たといふことである

今も丹後の船が直江津の港へ入る時には荒れると傳はる事は此の傳說の土產であらう

大納言の舊跡

三島郡出雲崎の山城屋と云へば旅館として昔から名代のものである、實に同町きつての舊家と云つてよい

天和元年の冬の事であつた、京の小倉大納言實起公はふとした事の行き違ひから遂に佐渡へ流謫の憂目を見なければならぬ事になつた殊に公一人のみかは嫡男の小倉宰相公蓮並に二男の竹淵刑部大季伴の二人もおなじく父に連れて佐渡へ流されたのであつた

三人の親子は中仙道を雨に降られ風に吹かれ幾度袂の袖を濡らしたことであらう、三人が出雲崎へ

辿り着いた頃は身は綿の如くに疲れてゐた

山城屋の主人五郎左エ門は親切の男であつた、任俠の男であつた、主人はこの世にも氣の毒なる一人の公達を心から厚くもてなした

人の親切程ありがたいものはない、ましてや落ち行く憂き身の人には夫が嫌悪であるやら知れない

幾日かの風待ちも今日は凪ぎたり出帆致すべしとて三人は感々山城屋に別れを告げねばならぬことになつた、實起は

古郷を出でにしよりも悲しきは馴れにし人の渡の別れ路

と歌ひ季伴は

親みなき波にうかるる身の憂さは人のなさけに思ひ忘れて

と歌つた、山城屋では今も其短冊を保存してゐるといふことである

月不見池

直江津から糸魚川の方へと汽車に乘行くと梶屋敷驛といふところがある、其處へ降りて早川といふ山川に沿ひ上流の方へ歩きゆくと新町などといふ小さい村々を過ぎ、鳥屋が嶽といふ名も偉さうだが大した事もない、小山の麓に月不見の池といふ池があるのであつた

周圍の樹々は鬱蒼として晝尚暗く、月の夜さへ月は其美しい面をうつすことが出來ぬとまで云はるゝ程で其の老樹には藤は高く花を垂れて實に一仙境と云つてよい、永祿十二年上杉謙信は加能に兵を出する際此處へ立ち寄り、池邊に大宴を張り一日の清遊を試みたと傳ひられてゐる

池に湧く水恁に透徹、冷きこと氷の如く爲めに魚もすむこと出來ない、月を見ぬ池はまた魚を知らない池よと里人には不思議に思はれた、聞く所によると最近能生の水產學校では此の池に姫鱒と云ふ鱒の一種を放ち養つてゐるさうである

初君の碑

來いと云ふたとて行かりようか佐渡へ佐渡は四十五里なみの上

實際昔の人にすれば佐渡は絶海の孤島人のゆくべき地とも思はれずにゐたに相違ない、佐渡へ流されるといふ事は何により重いいましめであつた

京の都人はよく佐渡へ流された、流される人は一まづ寺泊に船を艤ふて其處に待つのであつた、其待つ間に哀話情話の釀さるゝ事も珍しい事ではなかつた

永仁の昔であつた、冷泉大納言爲兼は執權相摸守貞時の不興を買ひ佐渡へ流さるゝ身となつた、爲兼卿は寺泊の驛長五十嵐家へ宿り其處で佐渡の船を待つことになつた、北國の海は毎日のやうに荒れた、今日も明日もと數ふる中に最早や幾十日を過ぎて終つた、

寺泊の港には遊女がゐた、當時四十九人ゐたことが或昔の書に書かれてゐる、今もその遊女の邸跡

だといふ處へ行く途中にある橋を四十九橋と云つてゐるのは當時の名殘りである、

遊女に初君といふ女があつた、端麗の姿は世の遊女とも思はれないまでにしとやかであつた姿ばかりではなくその心掛といひ嗜みといひ世にも優しいものであつた、爲兼卿の給仕に侍つたのはこの初君であつた、爲兼卿もこの初君の嗜み深きをめで給ひたが北海も浪穩かな日もある、愈々爲兼卿も佐渡へと立たなければならなかつた、初君は名殘り惜まれてならず愛慕の情は遂に

逢ふことのまた何時かはとゆふだすきかけし誓ひを神にまかせて

三十一文字となつて爲兼卿へと送つた、佐渡に渡つてからの卿もまた初君のことを思ひ出されてならなかつた、愛慕の情は

もの思ひこし路の浦のしら浪も立ちかへるならひありとこそ聞け

となつて初君に送られた、

後二條天皇の御代であつた、爲兼卿の罪も許されて再び京都へ歸ることが出來た、歸つて爲卿は玉

葉集の選者の一人となつた、卿はその玉葉集に初君の送つた歌を其集の中へ入れたのであつた、貞享年中寺泊の五十嵐家ではかゝる歌選集に越の人が選ばれたことは名譽の至りであると、國上寺の萬元律師に碑文を書いて貰ひ初君が住んで居つたと傳へらるゝ地に石碑を立てた、

その石碑は今も殘つて碑文も朧氣ながら讀まれるのであつた、

初君が逝つて幾百年、殘るは只世にも床しい傳說であつた、

愛子の里

中頸城郡飯砂村一帶は遠き昔は愛子の里と稱せられた、愛子の里……其名ばかりでも何か其處に因緣があると思はぬ人はあるまい、壽永の平家殘落は我國の哀史であつた、遠く春に散りゆく櫻の夫の如きはかなきは壽永の平家の公達の樣であつた、中にも平家の一族藤盛の奧方が落ちゆき給ひし夫の君を戀慕ひ可憐い脚を運ばせて親知らずの險まで來て遂に可愛其子を波に浚はれたが如きは聞く

だに涙の種、夫には別れ我子は波に浚はれ、この厭き世に身を寄する處なき奥方の心の中はどんなであつたらう、夕暮泣き〳〵進まぬ脚を運ばせて愛子の里い着いた時にはもう心も体も疲れ切てゐる、今更この身は生き甲斐はなかつた、また生きやうともしなかつた、生きやうともしない奥方にも思ひ出さるるは矢張我子の事であつた

風そよく愛子の里の糸柳亂れて物を思ひけるかな

は奥方の亂れた心が思ひやられて哀れの話である、

愛子の里即ち今の眞砂村を流るゝ小川に飯田川がある、飯田川は昔は涙川と云はれた、奥方の歌に

涙川其の水上をたづぬればひる子の森の雫なりけり

は奥方の哀傷思ひやらるゝのであつた、春は去り秋も逝き幾百星霜、殘る涙の話ばかりであつた、

桃園王邸跡

西蒲原郡彌彦砂子塚村の南の入口に畠ともつかぬ邸跡がある、老樹は森々としてあたり草茫々何かこれには由緒あるものと人を思はせずに措かない、里人はこれを桃園親王の古き御邸のあつた跡だと云つてゐる、

桃園親王は桓武天皇の第五皇子である、故ありて親王はこの草深い越後に來りこの彌彦の里に邸を構ひさせられた、親王の供奉の人に否瀨といふ男があつた、否瀨は親王に從ひは永い間此處にゐた否瀨の數代の後に俊兼に至り夫妻の間に子がなかつた、夫妻は夫を悲しんだ、そして信州戸隱山の九頭權現に祈念した、祈念は空しくはなかつた、祈念の月より十六ケ月目で玉の如き男の子が生れた、夫妻の喜びはたとへんに物なかつた、外道丸と名づけ掌中の玉として可愛がつた

外道丸は美童だつた、夫に利巧であつた、あまりの利巧さは薄氣味惡い程であつた、八歳の頃そろ

〳〵悪業がはじまつた、父俊兼の心配は一通てはなかつた、其心配の結果は俊兼は邸を和納へ移した外道丸は其饒嚴寺の和尚に通つたが矢張業修らなかつたといふことてある

外道丸の最後は何うなつたか傳說にはない、只砂子塚の邸は今殘つて昔を語つてゐる

宗祇の舊跡

僧宗祇は德川のの文明頃の坊さんて、和歌に巧てあること歷史にも傳ひられてある、彼れは芭蕉と同じく諸國を行脚し嫦霞を友として餘生を送つた、彼れが越後を行脚した當時の遺跡は其處此處にあるのてあつた

彼が靑海を、西頸城の駒返て)

行末を急くとすれば跡にのみ心をかくる駒返りかな

と歌つた長濱(中頸城)にて

行末の道を思へば長濱の眞砂を旅のうきかずにして

と歌つた、植崎の街はずれに鵜川が流れてゐる、今では石油流れ込み見るから黑き氣味惡き川、魚一尾住むことも出來ぬものとなつてゐるが、宗祇が此處を通りかゝつた時には淸流涼々として流れ若鮎は瀨を上つたり下つたりしてゐたものと見え

越路なる鵜川に鮎のすむものを鷹野にさしのなかぬものかは

と歌つてある、松崎の隣に比角村が續いてゐる、其村の鎭守は葉守神といふ小さやかなお宮がある、宗祇は夫へも詣つたと見え

今はは(ヤ)秋も半になりにけり葉守の神のいかに住むらん

と歌つてある

宗祇は長い間の旅に疲れたと見え野飼の牛に乘盜人の名を負ひ、今すんてに危い所を十二支を一句に込めて

午未申酉戌も亥なはい子丑寅ぬさへ卯きな辰巳に

と讀んだので其罪を許されたとある、兎に角面白い坊さんであつた、

三面村

享保の昔であつた、岩船郡は三面川の下流へ或日梨地に揚羽の蝶の紋の付いた香箱が流れて來た、里人は世にも珍しい箱よと驚嘆しないものはなかつた、果ては一休かゝる美しい立派のものは田舍人の持物とも覺えない、殿上人かさもなくば或は尊き宮樣かかゝる尊きものが流れ來るとは三面の川上に誰かすみ居るにはあらざるかと、噂は四方へと傳ひられよると觸ると其香箱の話して持切つてゐた、

村上の城守に越前守詮房といふ人があつた、こは面白き事よ、この川上を誰か探ぬるものはなきかと云へば私こそと四五人の若男が申し出てた、越前守は直に夫等の者に探檢の用意をさせ出發させ

た、三面川も村上から四五里の所は道もあの大した事もないが、さて夫から先は道とても山は高く峙ち、水は瀨となり淵となり、最早これから進むべくもなかつた、併し若者はおめ〳〵歸らるべくもない、またも勇を鼓し懸崖をつたひ、蔦や蔓に攀つて日に僅か一里か一里半も進めば此處に野宿するといふ有樣、この峨々たる高山の奥に何とて人の住まれやう、ましてやあの美しの香箱を用ひ給ふやうな高貴の方が居られやうとも思はれなかつた、若者ばもう根氣を盡きて終つた、初め城主に願ひ出てた時の氣込も功名心も、今や全然泡の如くに消え去つて心も体も疲れ切つて終つた、これから戻らうか……と云つて城主への面目を何うしやう、若者は進むにも進まれず、退くにも退かれず、空しく峨々たる山を仰ぎ、淙々たる川音を聞くばかりであつた、

若者が進むに進まれず、退くに退かれず、困り拔いてゐた所へ其處へ見慣れぬ人が弓矢を持つて通つた、衣賞といひ樣子といひ兎てもこの世のものとも思はれぬかけ隔つたものであつた、若者は驚くといふよりも恐ろしかつた、恐愕の一瞬の過ぎた後の若者は初めて自分等の探ぐるべきものを發

見したことを喜んだ、そしてその人に吐の奥に村あるかをたづねた、その人はうなづいたまゝ川上の方へと獸の如く瞬けていつて了つた

若者に俄に勇氣づいた、そして川上へ〳〵と辿り進んだ、そして萬山の底深き小さい盆地にさゝやかなる家の二十九戸あるを發見した、その時の若者の歡喜は譬へるに物なかつた、早速その旨を歸つて城主に告げた、城主は若者の手柄を厚く褒めたのであつた

三面川の上流、殆ど羽前との國境近くに何うして虜標の部落があつたのであらう、殊には其處にすむ人々は皆氣品ある顔、貌、毎日獵をしたり山のものを採つたりして其日〳〵を暮す賤しい業に滿足して、この山奥にすむとは何にか夫には由緒がなくてはなるまい、九州の球磨川の上流五箇山村に平家の殘黨か今尚あるとは日本外史を讀む人の皆知る所である、三面川の上流三面村には丁度夫にもました歴史、傳說があるのであつた

尋永の秋平家一門が壇の浦に殘落した話程世にも哀れな物語りはあるまい、美しい平家の公達か荒

れ狂ふ西海の浪の中に自ら投じて沈む、あの榮華を極め豪者を極めた平家の公達か一朝にして美しい身を海の藻屑と化さなければならない、並し日本歴史中壇の浦殘落程悲しいあはれな情緒をそゝる話はあるまい

其の殘落の際只一人大納言頼盛卿だけは助かつたといふのがこの傳說の抑もの發端である、頼頼卿か源頼朝とは敵味方の中ではあるがおなじうばなる池禪尼に育てられたといふ事が二人の心を近いものにさせた、夫で頼朝は内書を以て頼盛だけを招きたすけたのであつた、頼盛は一族を振切つて頼朝の情に縋らうか、夫とも夫を振切つて一族と最後を共にしやうか、惱ましい日が幾日も續いたく遂に頼盛は意を決し奥方水草の前、長男四明丸、二男愛宕丸、並に譜代の郎黨七人を隨へ奥羽へ落ちた、北陸道を落ち來つた一行は途中多くの艱難を嘗めた、殊に所々野武士がはびこつて何うともすることが出來なかつた、頼盛卿は仕方なく一まづ三面川の川奥へ身を忍ばせることにしやうと川上へと辿り上つた、初め一寸腰を卸す積りに假住居が遂に永びき、永びけば今更他へ行くことか

臆幼に感ぜられ、遂に其の儘其處にすんで終つた、四明丸は其後の名を小池大炊介と改め山獵を業として其日〳〵を送つた

三面川の水は今も昔の如くに流れてゐる、平家の殘黨も今も昔の如くに前山の奥深き地に其名殘を止めてゐる、風雨幾百星霜、今も三面の小池家には頼盛卿の着用したといふ直衣や、揚羽蝶の紋付た長柄の銚子などが殘つてゐるといふ事であつた

苗字塚

來迎寺の停車場から北方五六町と隔てぬ田甫の中に一つの塚がある、塚には石碑立ち風情ある松が翠滴らせてゐる、里人は之れを苗字塚といつてゐる

鎌倉の執權時頼が晩年剃髪して諸國を行脚した事は有名な話である、時頼が愈々我が越後の地へ入つたは正嘉二年の三月で、何んでも九月まで行脚したといふことである、時頼の行脚は勿論諸國有

司の非道を知り民の治安を計らん爲であつた、そして其頃まだ里人には苗字塚のないものなど澤山あつた、時頼は乞はるゝ儘に苗字をつけてやつたりした

時頼がこの來迎寺近い深澤の里へ來てこの塚のあたりに憩ふた、里人は見知らぬ坊さんの旅の疲れに憩ふてゐるのを見、寄つてたかつていろ〳〵の話をしかけた、勿論この人が世にも時めく鎌倉の執權北條時頼とは思ひもよらなかつた、時頼は里人の乞ふまゝに苗字をつけやつた、即ち深澤の里のものには剣持、澤の者に長足、親澤の者に大目、岩田の里人に鷲頭、浦村の者に根之神、子守等の性を與ひてやつた、里人は嬉々としで喜び夫から夫等の名字をつけて名乗つたさうである、苗字塚はさうした傳說を持つた塚てある、今も其傳說を其儘に田甫の眞中に昔ながらの姿に殘つてゐるのであつた

山田の燒鮒

中蒲原郡と西蒲原郡との境は信濃川が滔々として流れる、逆さ竹で有名な鳥屋野の村も其岸にある山田(曾の木村大字合子ケ作)の里もまた其の鳥屋野の上一里ばかりの所にあるのであつた、

山田には山王神社といふお宮かある、お宮は小さいが其處には燒鮒の池といふ妙な名の池かある、

その池には鮒かゐる、鮒は鮒たが普通世間にある鮒とは其樣か異なつてゐる、腹のあたりが稍薄黑く殊に背にかけては魚串にでも刺された跡かとも思はるる異樣の模樣がある、

越後へ流されて來た時であつた、この山田の里へ辿り着いたは夕飯近くの頃であつた、里人は信心が厚かつた、親鸞の德を慕ひ何とかして、一夜をこの山田の里に止めさせ給ふやうにと願つた、上人は里人の心持を心から喜んだ、そして一夜里人と語り明かすことにした、里人は何にも馳走はないがとて燒鮒を肴に酒を出して週した、上人は里人の厚意はうれしく思つた鮒には箸は附けなかつ

た、そして皿にもられた燒鮒をかたはらの池に投じた、投じられた鮒は不思議や生返つて池の中をさも有難さうに泳ぎまはつた、併し一度燒かれた黑い燒跡は其儘殘らずにはゐなかつた、燒鮒の池は夫から名づけられた名である、池の傍に一本榎の木があつた、その榎木は上人か衣をかけし木なりとて衣かけ榎木と云つてゐる、そして其榎木をきると木目に鮒の形があると云ひ傳ひられあるのであつた

順德帝遺跡

承久三年の戰ひは世にもあはれの最後を止めた、三上皇か一時に絕海の孤島(當時には)に流され遂にわれこそはこの島守よ、沖の浪風心して吹けとまで叫ばしめた悲慘の記錄を殘した、順德帝がわが越後の沖佐渡が島へ流され給ひ其處に寶算四十六歲の御若きを以て恨み深き御胸を晴らし給はずおかくれになつたことは痛ましい話であつた、帝が貞應元年六月二十二日寺泊から佐渡へ御わたり

になり上陸し給ふ時、都戀しとおふせ給ひしより其處を戀ケ浦と名づけ今も其處に石碑が建つてゐる、其歌に

いざさらば磯打つ浪にこと問はんおきの方には何にごとかある

と歌はせられ、遙沖の方を御見やり嘆かせ給ひしはづみに御つかを落させられ

つか間も身を放さじと思ひしに波の底にもさや思ふらん

眞野の里の行宮にわびしい生活を送り遊ばす帝の御心細さは如何ばかりであつたであらう、時にほ

ととぎすが血を吐くが如くに啼きゆけば

なけば聞く、きけば都の戀しさに此里すぎよ山ほとぎす

と歌はせられた、正中年中日野資朝が佐渡に流され此處へ來り

聞く人も今はなき世ぞほととぎす誰を忍びて過ぐるこの里

ながらへてたとへば未に歸るとも憂きは此世の都なりけり

と歌つた、僧宗祇行脚して舊跡をたづね

雲の上を浪の外まで流れ來し君が御影や有明の月

と歌つた、

草刈りの里をたづねて來しかども駒にものかふ人なければ

いろ〳〵の千種の里は下崩の松はひとつのみどりなりけり

などがある、

阿若隱れ松

佐渡は舊跡の國である、此處に彼方に殘る古き跡は皆悲しきものでない、ものはない、都の華やかさから、鳥も通はぬと云はるゝこの佐渡へ流され來つた人の跡に、何美しい樂い記錄が殘らう、中でも阿佛坊村の郊外日野資朝が斬殺された跡とか、資朝の永い間だ監禁され本間入道の邸跡とかは見

るもの何人か感慨無量ならぬものがあらう、本間人道の荒涼たる邸跡を見て資朝の墓ある妙宣寺へ行く途中の畠中に天を突くばかりの老松のあるを見る、これが阿若丸の隱れ松と云はれてゐる、正中二年日野資朝が佐渡へ流れ來た後に一子阿若丸が後を慕つて來た、才歳かそこらの子供が如何に父戀しとは云へ、この海山隔てた佐渡へたづね來るとは流石に大膽であつた、阿若丸は本間人道の家へ辿り着いた、そして切に父資朝に逢はせてくれよと願つた、人道の目は血も涙も出なかつた、この少年がはる〳〵京都からたづね來つた心を思つたら、一目逢はせてやるのが人間であらうに、母に强ひて願ひ千辛萬苦して來は來たものの其の父に、一目さへ逢はされぬ阿若の落膽はどんなであつたらう、身は我父と同じ家に住ひながら逢ふことの出來ぬとは、あまりに殘虐の運命に囚はれたものであつた、

人道は阿若丸が何に仕出かすやらの不安を覺えた、早く資朝さへ亡き者にすればと遂に阿若に知らせず、郊外に資朝を引出し遂に其の首を刎ねた、

幾日經つても人道は逢はせてくれず阿若はいろ〳〵した心持に焦燥の日を送つてゐた、すると下男の或者が資朝はもう遠うに斬られて終つたと事もなげに聞かせた、阿若の嘆き…それはほたの見る目も氣の毒な位であつた、阿若が遂に大膽にも本間人道を或夏の夕刺し殺し、邸を逃げ出たのは夫から間もない事であつた、追手を恐るる阿若は晝は麥畠に眠り夜は出て歩む、或日今すんでに追手に捕ひられやうとした時この松に身を忍ばせ遂に助かつたと云ふ、阿若隱れ松は夫から世に傳ひらるるに至つたとの事であつた、今は里人はこの松の周圍に柵を設け、松には注連がまはされてある

八英梅

八英の梅とは一つの花で八つの實を結ぶところからつけられた名前である、植物學上から云つたら何か其處には理由もあるであらうけれど傳說には科學は禁物、兎に角一つの花から八つの實が成るのが面白い不思議であるといふところに傳說の生命があるのであつた、親鸞上人が流されて越後へ

下つた時の事である、北浦原郡は小島村へ辿り着いた時に村に佐五助といふ實直の百姓があつた、佐五助親鸞を見て家へ入れて讀經を頼んだ、親鸞は見るかげもない旅僧を招じて讀經を頼む佐五助の奇篤に感じ、直に草鞋を解き入つてお經を上げてやつた、佐五助は喜んで何もなけれど飯を上られよと出したは御飯に梅干一つ、親鸞は心から嬉しく食べ其殘つた梅干の核を取り庭に下りて埋たそして親鸞は

後の世の印の爲に殘して置く彌陀頼む身の便りともかな

と一首を詠んで立去つた、

春風秋雨幾星霜親鸞の埋し核は芽を出し花が咲いた、其花が八つの實を結んだ、八英梅とは夫からの話であつた、

佐五助の家は其後絶えて終つた、今ぢや其梅のある所に梅護庵といふ庵が建られてある

姫名草

片邊鹿の浦中の川の水を飲むな毒が流れる日に三度……

片邊といふのも鹿の浦といふのも皆佐渡の北海岸、所謂北海の荒波に磯洗はるゝ淋しい漁村の名である、中の川とは其兩村の間を流るゝいさゝ川で其川には毒が流れる日に三度は……とのこの小唄にはまた哀れの傳說があるのであつた、

これも勿論昔の話である、或日の夕方其邊にあまり見受けない立派の舟が一艘この村近くの磯に漂ひ着いた、見れば不思議や船頭もあなければ誰もあないゝ只一人世にも美しい姫が泣きの涙に睡らした顔が村人に認められたばかり、聞けば都の京都て或若い殿と戀に落ち遂に只一人舟に流されたのだといふ、村の人々は世にも哀れに思ひ兩村の境なる中川の川上にさゝやかな庵を造つて姫を住ませた、浮氣は男には附物らしい片邊、鹿の浦の若い衆は今までの女を振捨てゝ日毎夜毎に姫に集

まつた、そして吾こそ姫の氣に入らんものと競つた、

姫には其樣な男に氣をむけるどころの話ではなかつた、都慰し慰して身も世もなかつた、其姫には村の若人が煩つてならなかつた、

姫にはまた一つ悶への種があつた夫は村の若い女の恨みを受けた事であつた、村の若い女は自分から男の離るゝは皆姫の爲との一事である、姫は困り拔いた、煩悶は日に日に續いた、苦惱は夜々に續いた、續いた擧句の姫は美しい軀を中川の淵へと投げた、

川の水は夫から濁つた、川原には紫の小草が生えた、これは姫の精であらう、土地の者は「姫名草」と今でも片邊、鹿の浦には美しい女は生まれないと云はれてゐる

女落ケ瀨

三條の大槻壯には三條城があつた、一名島の城とも云はれた、前の信濃川は自然の城濠をなし、平

城で、そあれ遠くから望めば實に嚴めしい美しい城であつた

島の城の城趾から上、信濃川の川瀨を女落ケ瀨と云つてゐる、女落ケ瀨……其の名から夫には傳說がなければならぬ

島の城は建久二年平賴盛が十萬石に封ぜられた時建てられたのであつた、平賴盛が源賴朝と特別の關係あり遂に屋島から逃れ來つたといふことは越後の其處此處に殘る傳說によりても事實の如くにも思はるる、賴盛の孫三條左工門は時々京都へ上つた、上つた左工門は京の女をめでては歸つた左工門の情を受けた京の女は左工門を忘れかねてはる〳〵花の都から越後へまで下つて來た、そして島の城へとたづねて來たが城の番卒共惡地惡く取次いでやらなかつた、京の女はこれは左工門の心變りから斯は情なくせらるると若い女の一心に思ひ詰められ、遂に城の上手の川瀨の中に美しい体を投じて終つた、女落ケ瀨の名は夫から起つたのであつた、

信濃川を上り下る舟は三條の上手の瀨を鬼門とした、其處へかゝると妙に舟に過が多かつた、時々

舟が少しも動かないことなどあつた、みれば水底に髪振亂した美しい女の俱めしくも凄い顔のみゆ

ることさへあると云はれてゐる、

三條裏館の寶塔院には京の女の亡き體を埋めたと云はる墓が苔蒸してゐるのであつた、

秋山入

此前七つ釜を書いた、七つ釜は清津川の上流である、其清津の谷を一つ越えた信州近い谷に中津川が清れてゐる、中津川を上り〳〵ゆけば萬山の底深き所に一つの小村がある、秋山入とは即ち夫であるのであつた

平家一門が壇の浦に落ち行く前に平維盛のみは逃れて紀伊に入り那智瀧へ投じたと日本外史には書かれてある、然し傳說には維盛を其處には殺さずにある

文治年中那智の瀧壺へ落ち最後を清うせんとした維盛も亦色々の事が思はれて死なれなかつた、一

族の面々が屋島から壇の浦へと落ち延びたが其最後の事も氣遣はれた、また若しや世は再ぶ平家の赤い旗を仰ぐこともなくもかなと未練の事が思はれぬでもなかつた、未練と知りつゝ未練を斷切ることの出來ぬ優しく生まれ附いた維盛、一先づ此浮世から忍ばせ時節を待つが最も賢明の手段と思はれた

那智から熊野と紀伊の山々をさまやうた維盛は遂に北國を指して落ちて來た、そして越の國も中津川の奥秋山入に足を止めたのは夫から二年後の事であつた、假の住居に朝夕慰ひ出さるゝは都の生活であつた、あらゆる善美、あらゆる幸福を集めた昔の生活が今更夢の如くにも繪の如くにも思はれて今こそ山奥のわび住居が情なく淚ぐまるゝまでに淋しかつた、殊には萬に一つの希望を屬してゐた平家の一門が最後の努力も水の泡となり其の儘海の藻屑と消えた時には維盛は最早この世に何にも興みはなかつた、火の消えたやうな闇の生活に其日〳〵を送つてゐた維盛も遂に再び花咲くこともなく其儘この越の山奥に屍を埋て終つた、今も秋山入は戶數は數十戶その名前には男は必ず平

の字をつけるといふことである

板山の池

柏崎の町端づれに一筋の川が流れて海へ入る、夫が鵜川といふ川でその川の上流に同じ名の鵜川村といふ里がある、その里の大字女谷の奥に三四里の山の中に一つの池がある、もうその邊は米山續きの山々は近々に迫り周圍の樹々は黒い影を湖面に落す、靜寂太古の如き物凄しさに思はず襟をかき合はすといふ有様、里人はこれを板山の池と名づけてゐる

女谷の村に布施德兵衛といふ庄屋さんがあつた、或晩のこと珍しく夢を見た、何んでも板山池の主だといふ見るから恐ろしげの龍が現れ來り、德兵衛に向ひ一つ願事があるが叶ひて呉れまいかと云つた、何に事が知らぬが兎に角云ひ給ひ叶ふことならと云ふと、實はこの度信州は野尻の湖（柏崎驛から一里と離れて居らない）の主と自分は何うしても戰はねばならぬ事になつた、就ては是非刀

を借りたい、若し承知して呉れるならお前の屋根の上に刀を上げておいて呉れと云つたと思つたら夢が覺めた、德兵衛は氣味惡いやら恐ろしいやら何うしてよいやら分からなかつたが、夢の通りにして置いたら身に誤りはあるまいと家傳の刀を屋根の上に置いた、置いて幾日も經たぬにその屋根の刀は見えなくつた

屋根の刀が見えなくなつてから野尻の池の水が眞紅に染つた、これは板山の池の主が刀で斬合をしたのに相違ないと里人に思はれた、それから間もなく德兵衛の家の屋根に刀が何時の間にかあげられてあつた、夫は此の前德兵衛の上げた刀であつた、見れは刀が少し缺けてゐたさうである、布施家では今もその刀を大切に藏つてあるさうである

玄蕃の森

浦村玄蕃の森に鳥止まらぬこそ不思議

浦村とは來迎寺村の一字彼の信濃川の鐵橋の架かつてゐる村のことである、その村の子守や若衆の唄にこの烏止らぬ不思議の唄はるゝも亦不思議のことであつた

玄蕃の森も昔の如き杉々たる偉は失せて今では只標の松が一本淋しく生えてゐるばかりである、昔この浦村に關玄蕃といふ物の哀れを知つた名家族があつた、飢饉だとて米倉を開いて救ひ、洪水だとて堤を築いてやるといふ至つて優しい領主が住んでゐた、その領主の子孫はよく先祖の美しい血を承け繼ぎ浦村一村いつも平和の黍穰のうちに暮してゐた、玄蕃の家も代毎に榮て信濃川にうつる土藏の白壁の影も賑やかなものであつた

領主はまた信心厚い人であつた、毎朝早く起き出ては遥伊勢神宮と米山藥師とは拜まぬ日とてはなかつた、今もその場所を花立城とて昔を偲ばせてゐる、關家が幾代か續いて庭長の初め苛政に苦しむ人民を救はうとて、人民の犠牲となりお上へ强願したのが祟つて遂に田地を殘收されることになつた、浦村の名家關家は斯うして亡んでしまつたのであつた、その關家の亡びる前の烏は關家の

庭の森に止らなかつた、これが凶事の前兆ではなかつたかと噂せられた、浦村の盆唄「烏止らぬ」はそれから出た話であつた、今も玄蕃の邸跡で土藏のあつた邊りは信濃川近くで土藏ケ鼻と稱せられてゐるのである

大蛇ケ淵

昔南浦原郡は五十嵐川の上流笠堀の村の名主に甚右工門といふ男があつた、先ども後ともたつた一人の子を掌の中の玉の如くに可愛がり育てた娘は世にも美しい女であつた、優しい中にも自ら備はる氣品、氣品の中に自ら艶かさあり、咲誇る妖艶の牡丹に端麗の櫻とこぎまぜたかと思はすばかりの顏姿、村の若者の何んとて言ひ寄らぬものとてあらう、吾れこそ名主樣の婿にと八人は愚幾十百人であるか知れなかつた、併し夫等の中には一人とて娘の眼鏡に叶ふものとてはなかつた

或夏の夕方であつた甚兵衛夫婦に娘は庭先へ出て秋の空かと思はるゝまでに晴渡る空に懸つたまん

まるの月の光を仰いで、今日の暑かつたことども話し合ふてゐた、すると玄關へ音もさせずにずつと入つて膝も優しく『御免下さい』と訪るものがあつた、出て見ればこは如何に衣服調度も卑しからぬ一人の若い武士が日は暮たり今宵一夜の宿を貸て給ほずやと顧ふその姿のしとやかさ、顧ふて下げた頭を靜に上げたとき月光紗にさしてうつし出した若い武士の美しい顏、甚兵衞は思はず『あつ』と叫ばずにはゐられなかつた、いそ〳〵と出迎ふ娘の顏のもみじしたるも月の光りで知られたその晩武士は甚兵衞の家へ泊つた、そして娘のまた來て給ひといふ聲を後にして飄然として立去つた、若い武士はその翌晩も亦たづねて來た、美しい武士を喜び迎ふるは甚兵衞夫婦ばかりではない、娘のいそ〳〵した喜悅に滿ちた姿は流石にと思はれずにゐられなかつた、娘はもう身も心もその若い武士に許して終つてあつた、

美しい武士は餘口數はきかなかつた、ただ氣品ある顏に始終微笑を浮べてゐるばかりである、娘は幾度貴方は何處の者ぞ、名前は何と申さるゝかとたづぬるも若い武士は只微笑みてゐるばかりであ

つた、嬉しい中の不安、娘は夫ばかり氣にしてゐた、

或晩であつた、若い武士はまた娘を訪ねて夜中に立歸らうとして立つた、娘は男の着物の裾に針を刺し夜明けを待つて糸を辿りに尋ね行きみると、五十嵐川の上流八木山下の見るも恐ろしげの淵に糸は入つてゐる、と見れば、その處へ大蛇が現れ來り、毎夜御身の許へ通つたは自分である、昨晩刺された針の傷にて今自分は死なねばならぬ、御身は折角者に暮せよ、自分は蔭ながら御身を守るであらうと云ふや否や、大浪起つてその體大蛇の姿は見えなくなつて終つた、娘はその後玉のうな男の子を産げた、併し脇の下には三枚の鱗か生えてあつた、名主の家は夫から代々その血筋を引いたと傳へられてゐる、

蚯蚓の糞

金があるとて高慢ぶるな佐渡ぢや蚯蚓が糞をひる

蚯蚓の糞が黄金であるとの俗謡は佐渡でなくては聞かれないものであらう佐渡は小布施村字西之川に砂金山といふ山がある、昔小布施の港へ船を着けた船頭が夕餉の菜にもとて村の百姓の所へ野菜を買に來た、丁度葱があるとて船頭は買求めた葱をブラ下げながら船へ歸るとこは如何に、葱の白根の方が黄金色に光る、よく〳〵眼を瞬れば葱の根に砂金の附着してゐるのであつた、喜ぶまいことか船頭は其翌日も其翌日も農夫の許へ行つては葱を買求めては來た、そして根に附いてゐる砂金を洗ひ取つては一人悦に入つてゐた、併し農夫は船頭が日毎日同じ葱ばかり買求めに來ることが不審に思はれずにゐられなかつた、そして買つでは持ちゆく葱をよく〳〵見れてば黄金色に光るさては船頭の奴め、葱の根に附着せる砂金が欲しさに斯くは買に來るのかと、其後農夫は畠をおこして砂金を掘つた佐渡は黄金の土があるは是から初まつた話で、黄金はこれ蚯蚓の糞であると思つてゐたとの事であつた、蚯蚓の糞ひる布施の村は今も砂金が出るであらうか、

刑部屋敷

―鐘ヶ池―

松之山の湯は越後にも古くから名高いものである、松之湯から二里もあらうか中尾といふ村には鏡ヶ池や刑部屋敷の跡がある、共にあはれにも床しい傳說があるのであつた、平安の初めである大伴家持の朝命を受けて東夷征討の途に上つたのは、文事にたけた家持も弓矢の道には思ふやうには行かなかつた、ましてや荒くれた夷共は家持を追ひまくつて終はんばかりの勢ひであつた、不首尾の報告を懷いて都へ歸つた家持は其儘退隱の身にならねばならなかつた、

快々の家持は都を出た、そして諸國流浪の途に上つた、そして流れ流れて越後へ入り中尾の里へ落着いた時の家持は名も刑部と改め昔の榮華も偲ぶによしもない樣であつた刑部には可愛い妻と娘とがあつた、世が世であつたら花の都の花と謳はるるの身も越の片田舍では空ゆく雲を眺めては身の不遇をかこつ外なかつた、不幸は續いた、妻は夫と娘お京を殘して空しく冷い骸となつて終つた、

母が今はの際にお京に與へたものがあつた、夫は小さい鏡であつた、そして我が亡き後に之を出して偲べとの遺言であつた、只さい淋しい田舍に一人の母に先だたれた京は取つく島もなかつた、其のやる瀬なさにお京は鏡を持つては近くの池の畔にたゝずみ鏡の中を覗き込んでは泣いてゐた、悲しみは幾日も續いた、

お京には其上苦しさが增した、夫は父が新に妻を迎へた事であつだ、新しい母はお京を憎んだ、何にかにと痛く當つた、たださへこぼれん露の如きお京はもう堪ふることも何も出來なかつた、お京が亡き母の形身なる鏡を懷いて池の底深く身を沈ませたのは夫から間もない話であつた、鏡ケ池の名は夫からの事である、

幾年後である阪上田村麻呂お東夷征討の途に上つたのは其途すがらこの松之山に立ち寄つた、そして刑部なる昔の家伴に逢つた、逢つた田村麻呂は昔に變つた家伴の姿に驚かれた、刑部は感に堪えぬ如く

かささぎの渡せる橋におく霜の白きを見れば夜ぞ更けにける

と唄つた

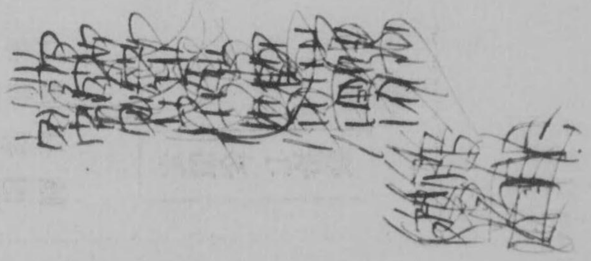
京都へ歸つた田村麻呂は家持をとりなした、家持は再び埋木に花咲く身となつた、そして妻に別れて京に上ることになつた、其時の妻はもう邪見の昔の妻ではなかつた、お京が池にはまつてからは今更の如く身の邪見が悔まれた、今夫に別かるゝに際し自分は此黛綠の髮を剃り尼となりお京の菩提を弔ふ事にした、家持は秘藏の觀音像を與へた、妻は喜んで庵を結び七十餘歲まで生きたと云ふ事である鏡ケ池は今はもう淺く小さく昔を偲ぶべくもない、刑部屋敷は昔ながらに殘つてゐる、後妻が貰つたといふ觀音像は今も殘つてゐる、凡ては家持はじめ妻や娘の哀話を思ひ出す種でないものはない

傳說の越後（終り）

大正九年八月廿三日印刷
大正九年八月廿五日發行
仝　年十一月廿二日再版印刷
仝　年十一月廿五日再版發行

定價金　七拾錢

編輯兼發行者　關川善三郎　長岡市上中島町五番地
印刷者　山崎正壽郎　仝市仝町二八番地
印刷所　株式會社　長岡日報　仝市觀光院町



393
39

終